鹿児島県自然災害履歴（旱魃のほか蝗害や疫病・飢饉・火災等を含まない）江戸時代以前史料大意

番号	元号・旧暦年月日　西暦年月日　災害種別・場所　依拠史料 記事　※引用している史料集や解説
1	**懿徳天皇の御宇　ＢＣ５２０～４７７　開聞岳　鹿児島藩史官記録** 懿徳天皇の御代に薩摩国の開聞山が湧出した。　※『鹿児島県災異誌』（以下『県災異誌』という）。『鹿児島県火山志』（以下『県火山志』という）によれば神代皇帝記から
2	**景行天皇20年10月３日　９０年11月　開聞岳　開聞神社縁起** 景行天皇二十年庚寅十月三日、一夜の内に涌出した。／景行天皇二十年庚寅十月三日夜、地面が震動し風雷が太鼓を叩くように繰り返し響き、開聞山が忽然と涌出した。※『県火山志』（前段は本文，後段は年表）。『頴娃郷旧跡帳』では「仁王十二代景行天皇二十年十月三日一夜の間に湧出した」
3	**慶雲３年７月28日　７０６年９月９日　大風・九州諸国　続日本紀** 太宰府が言上したところによると、所管内の九国・三島【壱岐・対馬・種子島】が大干魃と大風で、樹木が根こそぎ抜かれ、穀物が損傷した。使いを巡視に遣わし、（使いは管内を）回って、災害を被ることが最も甚だしい者の調【物納】や役【労役（の代わりの納税）】を免じた。
4	**和銅元年　７０８年　桜島湧出　薩児島図幅説明書** 大隅の国の向島【大隅正八幡宮【霧島市隼人町内の鹿児島神社】から海を挟んだ向こうにある島ということで桜島の旧名】が湧出した。　※『県災異誌』。『三国名勝図会』（以下『名勝図会』という）は「また一旧記に言うところでは、和銅元年、一夜に涌出した、祭神は月読尊であるとある。」
5	**和銅２年　７０９年　桜島湧出　西藩野史** 言い伝えでは、向島は元明帝期の和銅二己酉年に地中から出た。
6	**霊亀２年　７１６年　桜島湧出　鹿児島藩史官記録** 元正天皇の霊亀二年、白山権現が顕座して四年に大隅国の向島が湧出した。　※『県災異誌』。『県火山志』は、諸書によれば白山権現の出現は養老元年であって五年の相違があるとして、解釈を保留している
7	**養老元年　７１７年　桜島湧出　三国名勝図会** ある記録に言うところでは、養老元年丁巳に大隅の向島が涌き出した。…皇帝紀及び年代記の説は、桜島について養老年中の涌出とする。本藩では古来から、多くの人がこの説に従う。しかし、養老年中涌出の説は、正史である続日本紀に載っていないので、確証があるとし難いようだ。何故かといえば、【下の11の】国分沖の小島のような小さい島であっても、正史に涌出のことを載せているのに、桜島のような大きく立派なものについては、なお更正史に記すべきところを、その記載がないことから考えると、疑うべきではないか。故に、桜島は国が開ける前から、既に涌出していたものであろう。　※白尾国柱も同旨の論であると注記する
8	**養老２年　７１８年　桜島湧出　皇帝紀、桜島池田氏蔵年代記** 皇帝紀が云うところの、第四十四代　元正帝の霊亀四年、大隅国向島が涌出したということについては、続日本紀にこの事を記載していない。霊亀三年に養老と改元しており、つまり（霊亀）四年は丁度養老二年に当たる。桜島の士・池田新兵衛が所蔵する年代記には、養老二年に向島涌出とあり、此の説は　皇帝紀に言うところの霊亀四年に当たる。　※『名勝図会』
9	**天平14年10月23日　７４２年11月24日　地震・大隅国　続日本紀** 十一月壬子（十一日）。大隅の国司が、言上した。今月【とは今や先月になった10月】二十三日未の時【午後２時頃】から二十八日に至るまで、空中に音がして、太鼓のようで、野雉が驚き、地が大いに震動したと。

	丙寅（二十五日）。使いを大隅の国に遣わして問い調べさせ、併せて神命を請い伺わさせた。
10	**天平宝字３年８月29日　７５９年９月24日　大風・九州諸国　続日本紀** 太宰府が言上したところでは、去る八月二十九日に南風が大いに吹いて、官の建物及び民百姓の小さな家が壊れた。
11	**天平宝字８年12月　７６５年１月　桜島／隼人沖　続日本紀** この月、（京都の）西方に音声が生じた。雷に似て雷でない。その時、大隅・薩摩両国の境に於いて、雲の烟で空が暗くなり、雷光が飛び交った。七日の後に天が晴れた。鹿児島の信尓【又は「爾」】村の沖の海に於いて、金属を熔かして物を造るときのように炎気が露わに見えたことがあって、砂や石が自然に集まって三つの島と成った。島が連なった形を見れば、四阿［あずまや］の屋根に似ていた。島のために埋まったのは、民家が六十二区で人が八十人余りであった。　※『島津国史』、『西藩野史』や『日本災異志』などは桜島の涌出としたが、白尾国柱や『名勝図会』、『薩隅日地理纂考』更に『日本噴火志』は、現在の神造島がある霧島市隼人沖説。現在は，桜島東側の鍋山の噴火と比定・同定されている
12	**天平神護２年６月３日　７６６年７月14日　大風・三州　続日本紀** 日向・大隅・薩摩の三国に大風が吹いて、桑や麻が傷み尽くした。天皇の命で、柵戸【辺境域に設置された城柵を維持するために置かれた人々】が調や庸【労役（の代わりの納税）】がないようにした。
13	**天平神護２年６月５日　７６６年７月16日　桜島／隼人沖　続日本紀** 大隅の国に神が造った【上の11の】新島が震動して止まないために民が多く流亡した。よって援助物資（金品）を与えた。
14	**宝亀元年１月21日　７７０年２月21日　大風・九州諸国　続日本紀** 太宰府の管内に大いに風が吹いて、官の建物並びに民百姓の小さな家一千三十余りが壊れた。損害を受けた民百姓に物資を施し与えた。
15	**宝亀６年11月７日　７７５年12月４日　大風雨・日向薩摩　続日本紀** 太宰府の言上によると、日向・薩摩の両国に風雨があり、桑や麻が傷み尽くした。天皇の命で、寺院・神社の戸を問わず、均しく今年の調や庸を免じた。
16	**延暦７年３月４日　７８８年４月14日　霧島「曽乃峯」　続日本紀** 太宰府の言上によると、去る（延暦七年）三月四日戊の時【夜８時頃】に、大隅国の曽於郡にある曽の峯の頂上に於いて、噴火が大いに盛んで熾烈であった。雷鳴が轟くように響いた。亥の時【夜10時頃】になって、噴火の光が少し治まって、唯、黒烟だけが見えるようになった。その後、砂を降らし、峯の下五六里【20km以上】まで火山礫を積もらすこと二尺【60cm】程だった。その色は黒かった。
17	**弘仁４年10月　８１３年12月　大風・薩摩大隅　鹿児島県史年表** 薩摩大隅等五国が大風で、租【土地税】や調を免除した。
18	**天安２年５月１日　８５８年６月15日　大風雨・九州諸国　文徳実録** 大宰府の言上によると、去る五月一日に、大暴風雨があり、官の建物は悉く壊れ、青苗は傷み果て、九州・二島【壱岐・対馬】の全体が被災した。
19	**貞観16年３月４日～　８７４年３月25日～　開聞岳　三代実録** 太宰府の言上によると、去る三月四日の夜、雷が轟音を発し、夜通し震動し、夜明けが遅く、天気は曇り陰り、昼ながら夜のように暗かった。時に砂が降った、色は濃い墨そのもので、終日止まず、地に積もった厚さは、或る所は五寸、或る所は一寸余り。やがて日が暮れ、砂に代わって雨が降りだした。植物は皆、枯れ果ててしまい、河の水に砂が混じり、更に濁り、

	魚や亀等が無数に死に、死んだ魚を食べた人々に、或いは死に或いは病を得た者がいた。 秋七月の初頭、太宰府が言上したところでは、薩摩国にある従四位上の開聞神山の山頂で噴火があり、煙が天を満たし、灰や砂が雨のように降り、震動の音が百里余り先まで聞こえ、近在の民百姓は震えおののき萎縮した。
20	**元慶８年８月１日　８８４年８月25日　開聞岳　鹿児島県災異誌** ※『三代実録』の「八月己丑一日辰時【午前８時頃】に、（京の）西南の空に雷のような音が一度あった」ことを他書にない開聞岳のこととした。
21	**仁和元年７月12日　８８５年８月25日　開聞岳　三代実録** 太宰府の言上によると、七月、薩摩の国が言上した。同月十二日夜、空が暗くなり、星星が見えなくなり、砂や石が雨のように降った。過去の例を調べたところ、頴娃郡の正四位下・開聞明神が噴火した時、このようなことがあり、国司が身を清めて幣を奉ったところ、砂が降るのが止んだ。
22	**仁和元年８月11日　８８５年９月23日　開聞岳　三代実録** 八月十一日、（地が）震え、雷のような音がした。噴火は甚だ熾烈で、砂が降って地上いっぱいに積もり、昼でありながら夜のように（暗く）なった。十二日、辰【午前８時頃】から子【深夜０時頃】にかけて雷電が走り、砂が降り止まず、砂や石が地に積もり、或る場所は一尺以上、或る場所は五六寸以上、田野は脛まで埋まり、人民が騒動した。
23	**天慶８年　９４５年　霧島山　鹿児島県噴火書類（福島厳之助編纂）** 襲山考が言うところでは、「今、縁起及び僧性空伝や平家物語等を勘案すると、天慶八年に性空…真心から、山頂に登り法華経を誦えて限るに七日を以て神勅を受けようと欲し、そして居ること五日にして、山じゅうが震動し盛大に噴火し、暫く止まなかった。」　※『日本噴火志』。増訂版『大日本地震史料』も同年にかけているが、伊地知季安の鹿児島県立図書館蔵の『襲山考』には「僧の性空…天慶八年乙巳十八歳にして髪を比叡山で剃った。応和三年癸亥三十六歳にして家を出て、深山を、人が足を踏み入れず鳥の鳴き声さえも聞えないような奥深くに分け入り、日向の霧島に行き庵を建てて暮らして、頂上に登って法華経を誦えて神勅を受けるよう祈ろうと欲して、限るに七日を以て（神勅を）と始めて五日目に、山が震動し烈しく噴火して暫くたっても止まらなかった。」とあり、霧島山での修行や噴火との遭遇は応和３年【９６３年】のこととする方が妥当であると思われる（他方、『性空上人伝記遺続集』によれば、36歳・天慶８年＝西暦９４５年か。また、『県火山志』が引用する『襲山考』の文章は、鹿児島県立図書館蔵のものとは異なり、「比叡山で剃髪して、辞めて日向に回って来て」の間隔が不明で、両方が天慶８年のこととも読める）
24	**万寿元年７月　１０２４年８月　雨氷・大隅　鹿児島県史年表** 大隅で雨氷【雹・霰】
25	**天永３年２月３日　１１１２年３月２日　霧島・西峯　三国名勝図会** 西峯の噴火　この峯は所謂「火常峯」であり、古来、頻繁に噴火している。そのことは、伝紀並びに当村の西御在所霧島神社及び小林の霧島山中央神社等の旧記に見えている。続日本紀の　桓武帝、延暦七年三月四日、国史に見えるのは、これが最初で、各神社の社記に見えるところでは、　鳥羽帝、天永三年壬辰二月三日から起り、　／　霧島山中央六所権現宮…、天永三年壬辰二月三日、霧島山上に火を発し、新燃岳の神社寺院が焼失した。
-1	**霧島山上　錫杖院縁起** 霧島山頂が大いに噴火し神社を焼いた。　※『県災異誌』

26	**永久元年２月３日　１１１３年２月20日　霧島山　日向郷土史年表** 霧島山が噴火した。霧島峯神社を焼いた。　※『県災異誌』。上25との混淆の可能性があるか
27	**仁安２年　１１６７年　霧島山　三国名勝図会** 霧島山大曼荼羅院西生寺…梅北村【都城市梅北】益貫にある。（初め）霧島山の東麓・佐野に寺を建立して、その後、住持が尋誉上人であった時、一夜、神童が来て告げて言うには、「三日を経て霧島山に火が起り、寺院一帯が罹災する。速やかに三里の外に退け」と。ここに於いて、南方の今の地・梅北に移る。果して霧島山に噴火が起り、殿堂が焼け崩れた。時は仁安二年のことであった。
28	**嘉応元年７月　１１７０年８月　大風雨・大根占　三国名勝図会** 諏方上下大明神社…同【嘉応】二年庚寅七月、大風雨にて洪水が起こり、横流して社壇が海上に流れた。
29	**寿永２年12月17日　１１８４年１月31日　霧島山　日本噴火志** 霧島山が噴火。(【ジョン・】ミルン氏調査)　※『日本震災凶饉攷』では「この歳、大隅の霧島山が噴火（吉記、地震考）」
30	**寛喜２年８月８日　１２３０年９月16日　大風・九州諸国　藤崎社文書** 暴風が俄に吹き、霊木が尽く倒れ、その上、神殿以下の建屋を潰した。 ※『県災異誌』
31	**文暦元年12月28日　１２３５年１月18日　霧島・西峯　三国名勝図会** 西峯の噴火…各神社の社記に見えるところでは、…その後　四條帝の文暦元年十二月二十八日の噴火は甚だ盛んで、神社仏閣が皆、焼け尽きたとあり、　／　西御在所霧島六所権現社…文暦元年甲午十二月二十八日、山上が、また、火を発して、神社・寺院及び宝物・文書等が悉く焼失した。 ／　霧島山中央六所権現宮…文暦元年甲午十二月二十八日、新燃岳から火が大いに発されて、神社等が、また焼失し、砂石が降り一帯を埋めた。これより前には、この高千穂峰の辺りは、水泉が湧出していたのが、ここに至って水泉が甚だ乏しくなり、山上の居住ができなくなり、　／　狭野大権現社…社記が記すところでは、文暦元年甲午十二月二十八日、霧島山が大噴火し、当社、並びに別当寺は焼失に及ぶ、　／　霧島山仏華林寺神徳院…文暦元年甲午十二月二十八日、霧島山が噴火して、神社仏閣が悉く焼失し、　／　霧島山華林寺東光坊錫杖院…天永三年壬辰二月三日・文暦元年甲午十二月二十八日、霧島山が噴火して、寺廟が共に焼失し、当寺は廃した。　※白尾国柱の『麑藩名勝考』は、社伝に「文暦元年十二月二十八日の噴火より大きいものはなく」と見える、とする
-1	**霧島山　霧島山仏華林寺狭野世譜** 鉾之峯から火坑が震わし、裂け、焔石・熱砂が伽藍を埋没した。
32	**文暦９【元？】年12月　１２４３【３５？】年　霧島山　麑藩名勝考** 狭野社伝が言うところでは、文暦九年【文暦は２年までしかなく「九」は「元」の誤りか？】十二月、霧島山が盛大に噴火して、神廟寺院がすべて火災にかかった。この時、神代の霊宝・伝記・宣命等が悉く焼失した。
33	**正安３年11月21日　１３０１年12月21日　大風・甑島　北条九代記** 異国船が数隻、薩摩の国の甑島に着いた。大風が吹き、異国船は忽ち姿を消したとある。　※『県災異誌』。外国船漂着の江戸時代の記録は多数
34	**至徳２年６月24日　１３８５年　大風雨・田代　田代之宝光寺古年代記** 夜に向かい大風・大雨に依り河南郷白河辺りの在家の多くが悉く押し流された。

35	**応永14年７月28日　１４０７年８月31日　大風・田代　宝光寺古年代記** 七月大風同二十八日人が多く死んだ。
36	**応仁２年　１４６８年　桜島　福昌寺旧記、鹿児島図幅説明書** 向島の山上が噴火した云々　※『桜島大正噴火誌』。白尾国柱の『麑藩名勝考』は「桜島の山上が噴火し、」とする
37	**文明３年９月12日　１４７１年11月３日　桜島　桜島池田氏蔵年代記** 向島の黒神村で噴火し、人が多く死んだ。　※『旧記雑録』
-1	**桜島　福昌寺旧記** 文明三年九月九日（から）十二日、桜島山上に火を発し、黒神村の上は特に熾烈であって、　※『県火山志』
-2	**桜島　三国名勝図会** 福昌寺年代記並びに諸旧記に、文明三年九月十二日、向島黒神村で神火が噴火し、／この島の内には燃崎と呼ぶ地があちこちにある。一つは黒上村にあり、文明三年九月十二日、この村の上が噴火し、大石を飛ばし、砂を降らした。火山石が堆積して岩丘となった。土地の人は燃崎と呼んでいる。
-3	**桜島　重豪公御譜** その東南の厓を名づけて燃崎と称しており、砂や石は皆黒く、まさに当時（ソノトキ）焼けた所の跡である。　※『旧記雑録』
38	**文明５年４月　１４７３年５月　桜島　地学協会報告** 大隅の桜島嶽が噴火した。　※『日本災異志』
39	**文明７年８月15日　１４７５年９月24日　桜島　桜島池田氏蔵年代記** 向島の内の野尻村で噴火した。　※『旧記雑録』
-1	**桜島　福昌寺旧記** 野尻村火を発し、　※『県火山志』
-2	**桜島（沖も？）　三国名勝図会** 福昌寺年代記並びに諸旧記に、文明七年八月十五日、向島野尻村で噴火が起き、／【燃崎の】一つは野尻村と湯之村の境界にあり、文明七年八月十五日、野尻村で噴火が起き、砂石が降った所であり、燃崎は平らでなくゴツゴツしている。／烏島　地頭館の南、七町【700m強】位、赤水村の南、三町【300m強】位の沖にあり、文明七年八月十五日、野尻村で噴火が起き、島人の伝承ではこの時に涌出したという。今は雑木が繁茂する。地元では松の木が生じづらいと言われ、今でも一本も松の木が生じることはない。烏鴉が多く集り栖む。よって、この名を付けられたとか。周囲は半里【２㎞】位あり、人は住んでいない。／沖小島　地頭館の南、一里二町【4,147m】位、湯之村の前にあり、横山に属す。大きさは烏島の倍ある。泉があり、文明七年八月、野尻村で噴火が起きた時、烏島と同時に涌出したという。これは、安永【８年以降】に新島が涌出した類であろう。或るいは文明七年以前、桜島噴火の時に涌出したともいう。今、松の木が多い。
40	**文明８年５月12日　１４７６年６月12日　桜島　西藩野史** 大隅の向島、或いは桜島と名付ける、噴火して噴煙が立ち込め灰や砂が飛んで隣国にも降った。
-1	**桜島　日本災異志** 大隅国大隅郡の桜島嶽が噴火し、岩石が破裂して人畜が多く死亡し、数日の間降灰があって、十数キロメートル離れた丘や畝を覆い渓谷を埋め、集落一帯は白砂の堆積となった。　※『鹿児島名勝考』と『西藩野史』からとするが９月12日の記事と混淆（五と九の混同）か
41	**文明８年９月12日　１４７６年10月８日　前震・桜島　島津国史** 桜島で地震が五日続き、十二日になり噴火した。地が割れ、崖が崩れ、人

	畜を圧して死なせ、そして、その東西に面する海中に島が躍り出た。広さ【？周囲？】二里で本島と合わさり一つになった。また、島の四方数十里の範囲に灰を降らすことが数日あって、丘や畝を覆い渓谷を埋め、集落一帯は白砂が堆積した。
-1	**桜島　福昌寺旧記** また大いに燃え上がる。人馬の死傷は記録し尽くせない（程多かった）。隣国に至るまで砂や灰を降らすこと五日。※『県火山志』
-2	**桜島　玉龍山続年代記** 向島が噴火した。火山噴出物を飛ばし、人家や畜舎を焼くこと数しれず、沙や灰が近国に降った。大いに地が震え、山の西面（城下側）に島が涌き出た。周囲が二里位だった。　※『県火山志』
-3	**前震・桜島　三国名勝図会** 福昌寺年代記並びに諸旧記に、文明…八年九月十二日、桜島が大いに噴火する。この五日前から、大地震が起き、この日に至って岳の上の山体が崩壊し、砂や灰が近国まで大いに降ること七日位であった。同月十九日に及んでは、未刻【午後２時前後】から真の暗夜のようであった。この島の西南地から溶岩が涌出して、本島に連なった。その周廻は二里許【８㎞程】であったろう。これが今の燎崎のことであると言う。また、沖小島・烏島が涌出したことであると言う。沖小島・烏島の涌出とすれば、その周廻は二里許ということが符合しない。それは、当初は、二島が接し合って本島に連なり、その後に土地が沈んで二島に分かれたのかも知れない。安永期に、新島が涌出して、また、その沈んだものがあるようにであったろうか。噴火や砂・石のために家屋が埋没し、人畜が多く死亡し、数えきれない程だった。　※『薩隅日地理纂考』も同文
-4	**桜島　重豪公御譜** 文明八年に桜島が噴火したことが有り…たしかに土中に硫黄の気が有り、故に時には噴火する。しかし、天平宝字八年【７６５年】から今年【安永８年・１７７９年】に至る千有余年、こうして、その間に噴火したのは二回で、常にはない災害と言うべきであるか。　※『旧記雑録』
42	**文明10年　１４７８年　桜島　地学協会報告** 桜島が噴火して灰を雨らし、福山の原野が四里、変じて砂漠となった。 ※『県災異誌』。『日本震災凶饉攷』も同旨
43	**文明18年８月3,15日　１４８６年８～９月　大風・田代　宝光寺古年代記** 八月三日【１４８６年８月31日】大風、同十五日【９月12日】大風で餓死。国中が飢饉で人民が多く死んだ。
44	**永正８年８月18日　１５１１年９月10日　大風大水・田代 宝光寺古年代記** 大風・大水で飢饉。
45	**大永４年11月23日　１５２４年12月18日　大地震･霧島山　玉龍山続年代記** 夜､大地が震え､山丘が崩れた。　※『日本噴火志』
46	**天文13年４月，14年３月　１５４４年５月，１５４５年４月　大地震** 天文十三年四月二十二日【１５４４年５月13日】、大地震、【被害状況は不明であるが熊本県南部の球磨相良氏の「当家日記」である「八代日記」にも大地震と記録されている。】 天文十四年【１５４５年】この年三月、大地震、時【２時間程度？】の内に三度あった、　※『舊記雑録』
-1	**天文13年４月22日　１５４４年５月13日　大地震・田代　宝光寺古年代記** 夜、大地震で岸が崩れた。

47	**天文16年６月18日　１５４７年７月５日　大風雨～洪水・南薩？　年代記** 大風雨・洪水で、（現在の南さつま市の北端・旧金峰町を南北に二分していた）（南方の）阿多と（北方の）田布施との間の大橋が落ちた、閏七月二十一日、大風雨で、同二十八日【９月12日】、申の刻【午後４時頃】から酉の末【午後７時頃】まで大風で、寺社が少々吹き壊された、
48	**天文20年８月15日　１５５１年９月15日　大風・田代　宝光寺古年代記** 夜に入り大風で翌日は一日諸家尽く吹き崩れ、五穀（の種子が）断絶。
49	**天文23年～弘治元年　１５５４～１５５５年　霧島・西峯　三国名勝図会** 西峯の噴火…各神社の社記に見えるところでは、…この後久しく休んで後奈良帝、天文二十三年から弘治元年に至って、噴火し、
50	**永禄９年４月７日　１５６６年４月26日　霧島　日向飫肥松井蛙助年代記** ※『県災異誌』。『県火山志』によれば「霧島山が炎上した」
51	**永禄９年閏８月９日　１５６６年９月22日　霧島　神祇全書** 庄内の一向宗【浄土真宗】信者３００人が、霧島詣りをし、噴火に会い、全部死んだ。　※『県災異誌』
52	**永禄９年９月９日　１５６６年10月21日　霧島・西峯　三国名勝図会** 西峯の噴火…各神社の社記に見えるところでは、…また　正親町帝、永禄九年九月九日、また噴火を始めて、人が多く焼死し、
-1	**霧島・西峯　島津国史** 霧島が噴火して延焼し、人が多く焼け死んだ。（湯地嘉左衛門家蔵文書に拠る。　霧島嶽は日向・大隅の二州に跨り、東は高原郷に属し、西は曽於郡に属する。）
53	**天正２年１月　１５７４年１～２月　霧島　玉龍山続年代記** 霧島に神火が生じ天地が震動した。　※『日本噴火志』
54	**天正４～６年　１５７６～７８年　霧島・西峯　三国名勝図会** 西峯の噴火…各神社の社記に見えるところでは、…天正四年から同六年に至って、また噴火した。
55	**天正13年　１５８５年　霧島山　地学協会報告** この年、大隅の霧島山が震動し、噴火した。　※『日本災異志』。『日本噴火志』は「一説では天正十三年十月七日から大地震が年を越えたとあり」とし、『県火山志』は松井蛙助年代記から「大地震が年を逾えた」とする
56	**天正15年４月17日　１５８７年５月24日　霧島　鹿児島県噴火書類（福島厳之助編纂）** 霧島が噴火し、震動し、黒煙の上に白雲がたなびき、一日二三度、高く大きく立った。　※『日本噴火志』
57	**天正16年３月12日　１５８８年４月７日　霧島山　鹿児島県噴火書類（福島厳之助編纂）** 霧島山が噴火し、申酉【午後３～７時頃】の間、大地震。※『日本噴火志』
58	**文禄元年正月14日　１５９２年２月26日　地震・大隅　宝光寺古年代記** 大石や大木が倒れる程の地震があった。同十月十六日【11月19日】にも地震があった。
59	**文禄５年閏７月９日　１５９６年９月２日　大地震・薩摩　椛山紹劔自記** 薩摩は大地震【＝慶長伊予地震】であった。京都の地震【慶長伏見大地震】は十二日【９月４日（慶長豊後地震が起きた日）】の夜【９月５日午前０時頃】であった。諸屋敷や町屋などは言うに及ばず、金銀をふんだんに使った御殿も崩れて、数百人が打ち殺されてしまった。　※『旧記雑録』
60	**慶長３～５年　１５９８～１６００年　霧島・西峯　三国名勝図会** 西峯の噴火…各神社の社記に見えるところでは、…　後陽成帝、慶長三年

	から五年に至って、また噴火した。
61	**慶長９年12月16日　１６０５年２月３日　大(津)浪・薩摩大隅　樺山権左衛門尉久高譜中義久書状** （加治木辺り中心の鹿児島湾内でなく）東目【大隅】から西目【薩摩】にかけての海浜に大浪が寄せて来た。建屋のことは言うに及ばず、人も多数被害を受けた。（地震自体は（鹿児島では尚更）大きくなかったのに突然津波が押し寄せて来て）誠に不思議の災難でありました。　※『旧記雑録』
-1	**橋（口）市郎右衛門所持之古日記** 四方の浪が立ち【津波が押し寄せ】ましたこと、慶長九年十二月十五日【１６０５年２月２日】の夜戌亥の時【午後９時頃】だった。その時は（西目＝薩摩半島の南西部の）坊之津・久志・秋目・博多浦、（東目＝大隅半島の南東端の南大隅町佐多の）大泊・辺津賀【辺塚】などで舟が非常に（多く）破損し、人的被害もありましたとのこと【鹿児島湾内の例示なし】
62	**慶長13年５月14日　１６０８年６月26日　洪水・伊作　三国名勝図会** 仏母山多宝寺…洪水があり、寺山が崩れ、寺屋が埋まり、文書・旧記を悉く失い、由来が詳しくわからなくなった。
63	**慶長18～19年　１６１３～１４年　霧島　霧島神宮旧記** 慶長一八年から翌年に至って、また噴火した。　※『県災異誌』。白尾国柱の『麑藩名勝考』も同旨記述
64	**元和元～２年　１６１５～１６年　霧島　霧島神宮旧記** 元和元年から翌年に至って、また噴火した。　※『県災異誌』
65	**元和２年５月～　１６１６年６月～　洪水・田代　宝光寺古年代記** 五月から百日（間）の大雨で洪水が七度出た。諸種（の作物）の作（柄）も悪かった。植物の種子が断絶した。
66	**元和３年８月～　１６１７年９月～　大風洪水・田代　宝光寺古年代記** 二度の大風・洪水で北尾蚕口の鳥井戸に水が及んだ。作（柄）も田・岡【？畑？】共に悪かった。
67	**元和３～４年　１６１７～１８年　霧島・西峯　三国名勝図会** 西峯の噴火…各神社の社記に見えるところでは、…　後水尾帝元和三年から翌年に至って、また噴火した。
68	**元和３年10月20日　１６１７年12月18１８日　霧島山　日向国史** 霧島山が噴火した。
69	**元和６年　１６２０年　霧島山　日向国史** 霧島山が噴火し、近くの村の被害が多かった。故に、調べて、田地の位を改定した。
70	**元和６年　１６２０年　大風・田代　宝光寺古年代記** 度々の大風で諸種（の作物）の種子が断たれた。小根占蒲田原で大崩れ。人人（が）五十人死んだ。
71	**元和６年７月２日　１６２０年７月３１日　洪水・指宿　神社調** （(開聞）新宮九社大明神＝揖宿神社の）縁起・旧記・高御目録・名寄等は、元和六年庚申七月二日【１６２０年７月３１日】の洪水に（より）流失致しました。申し伝え（がある）だけで、詳細な由緒は御座いません。
72	**寛永５年９月29日　１６２８年10月26日　霧島　日本地震資料（中央気象台編纂）** 霧島山が噴火し、社寺の宝物が焼けた。　※『県災異誌』
73	**寛永７年８月６日　１６３０年９月12日　大風・田代　宝光寺古年代記** 夜中から……の大風で万事被害があった。崇忠・岩松院両寺に家も無く倒壊した。在所の家もまた草木も残らず転倒した。更に田も皆々損じた。

74	**寛永12年７月25日　１６３５年９月６日　大風・田代　宝光寺古年代記** 大風に（因り宝光寺の）大庫裡が（破）損した。
75	**寛永13年８月11日　１６３６年９月10日　大風・田代　宝光寺古年代記** 大風で（宝光寺の）客殿が破損した。衆寮三御に四方の廊下は皆破損しました。大門は存（置）した。境内を造立し（直し）た。
76	**寛永14～15年　１６３７～３８年　霧島　麑藩名勝考** 噴火…寛永十四年丁丑から翌年に至る。　※『県災異誌』が『名勝図会』からとする「寛永十四年より翌年に至り又燃ゆ」との記述は確認できない
77	**寛永19年３月７日　１６４２年４月６日　桜島　三国名勝図会** 福昌寺の年代記【玉龍山続年代記とは別か】並びに諸旧記に、寛永十九年三月七日の晩、向島が噴火した云々と見える。
78	**慶安３年　１６５０年　大雨・鹿児島城　鹿児島県史年表** この夏は大雨により鹿児島城が大破した。風水害および虫害のため、藩内の損害が多かった。
-1	**慶安３年９月　１６５０年９～１０月　洪水・諸国　年代實録** 清の順治七年、庚寅九月【９～10月】、諸国で洪水があった。
79	**慶安５年８月　１６５２年９月　大風・田代　宝光寺古年代記** 大風で大木や家が皆破損した。
-1	**慶安５年８月９～10日　１６５２年９月11～12日　大風・加治木　隅陽記** 九日晩九ツ時【23時半頃】から十日四ツ時【９時半頃】まで大風、郷士（の住む麓）から町まで、家が大小三百三十余転倒しました、
80	**明暦３年６月　１６５７年７月　大雨　鹿児島県史年表** 大雨・水害、損害が多かった。
81	**明暦３年９月12日　１６５７年９月19日　地震　玉龍山続年代記** 大口と羽月の境に旗のように立つ物があって、一里先から見えた。九月十二日夜、大いに地が震えた。
82	**万治２年１月～寛文元年　１６５９年３月～１６６２年　霧島・西峯　三国名勝図会** 西峯の噴火…各神社の社記に見えるところでは、…　後西院帝、万治二年正月から寛文元年に至って、また噴火した。　※白尾国柱の『麑藩名勝考』は「寛文元年十二月に至る、」（～1662年２月）とする
83	**寛文２年８月～４年３月　１６６２年９月～１６６４年４月　霧島・西峯　三国名勝図会** 西峯の噴火…各神社の社記に見えるところでは、…寛文二年から　霊元帝、同四年に至って、また噴火した。　※白尾国柱の『麑藩名勝考』は「同【寛文】二年八月から噴火し同四年三月に至る、」とする
84	**寛文２年９月19日　１６６２年10月30日　地震・日向　続日本王代一覧** 島津但馬守の領地の日向国佐土原で大地震がおき、城中の石垣が崩れ、侍屋敷や百姓家等八百余棟が倒壊した。　※外所＜とんところ＞地震であり、『日向国史』等に「地が落ち窪んで海となること周囲七里三十五町【約30キロメートル】田畑八千五百石余」等と詳説
-1	**地震津波・大隅　日本災異志、日本震災凶饉攷** 大隅もまた、地が大いに震え、津波が起り、山が崩れ、地が裂け、陸地が海となったのが数十町（数十ヘクタール）。人畜が多く死亡した。（続皇年代略記~~、続日本王代一覧~~、日本野史~~、玉露叢~~）
85	**寛文２年10月　１６６２年11月　地震（津波？）・大隅　玉露叢** 同年同月【寛文２年10月】、大隅国が大地震で海が陸地となったと云う。

-1	**大隅　三国名勝図会** 和漢合運に、寛文二年十月、大隅が大地震で海が陸となったと言う　※白尾国柱の『麑藩名勝考』も寛文二年八月からの霧島の噴火の項に注書きをして「正に之を云うのであろう」とする
-2	**寛文２年10月１日　１６６２年11月11日　地震・大隅　続史愚抄** 大隅が大地震で山が崩れ海が埋まった。（本朝年代記、年代略記）
86	**寛文３年７月26日　１６６３年８月28日　大風雨・九州西部　徳川実紀（厳有院殿御実紀）** 三時ほどの間【５～６時間】、九州は大風雨で、薩摩・肥後・肥前は特に激しく、長崎では人家が倒壊し、外国商船も損傷した旨の報告があった。（日記、公儀日記）
87	**寛文９年８月11日　１６６９年９月６日 大風洪水・田代 宝光寺古年代記** 大風・洪水で耕作は悉く損われた。薩（摩）・（大）隅・日（向）の三ヶ国は飢饉だった。 大風に客殿の上の◎【梁か屋根葺か】（が）（破）損しました。
-1	**夏から秋　大風・種子島　種子島家家譜** 夏から秋に至るまでに二つの大風。田畑を破ること多。
88	**延宝２年８月17日　１６７４年９月16日　大風・田代　宝光寺古年代記** 大風（で）耕作（物）は悉く損亡した。
89	**延宝５年　１６７７年　霧島山　鹿児島県噴火書類（福島厳之助編纂）** 霧島山で噴火が起きた。　※『日本噴火志』
90	**延宝５年６月　１６７７年７月　洪水・大口　鹿児島県史年表** 大口に洪水があった。
91	**延宝６年正月９日　１６７８年３月１日　霧島山　鹿児島県噴火書類（福島厳之助編纂）** 霧島山で噴火が起きた。　※『日本噴火志』。『日本災異志』等にはない
92	**延宝６年正月９日　１６７８年３月１日　桜島　地学協会報告** 大隅の桜島山が噴火した。　※『日本災異志』
93	**延宝９年４月末～５月末　１６８１年６月15日～７月14日　土砂災害・種子島　種子島家家譜** （一月間）日夜甚だしく雨が降った。茎永村の雪子ノ峰が崩れること八十間位【150ｍ弱】。峯の下の人家八軒が埋没し、男女四人が圧死した。田地五反九畦二十七歩【約5,940㎡】永損であった。
94	**天和２年５月19日　１６８２年６月24日　洪水・川辺　次渡日帳か** 五月十二日曇天、十三日から十八日まで引続き雨天、十九日朝四ツ時【10時頃】から大洪水となり、六十年来の大水で、川原町の人家には残らず皆一様に水が上り、このため錦が袋の土手が切れ、川原田一帯に砂を上げ、くみ迫一帯を水が洗い、その外木牟礼の土手が切れ、抜古川【？払川？】一帯を通りました。　※『川邊村郷土誌』『川辺町郷土誌』
95	**天和３年10月　１６８３年12月　地震・大隅　日本災異志** 大隅国で地震があり、海が陸となった。　※信越地震記からとする。前ページの83･84（寛文２年９・10月についての各書）の表現に似る
96	**貞享５年８月18日　１６８８年９月12日 大風高潮・種子島 種子島家家譜** 終日大風で、潮水が大いに溢れた。七八十年来、未だかつてなかったことであった。海辺の人家が尽く漂流した。凡そ、家を倒すこと八百四十九（棟）、牛馬を斃すこと百十七疋、船を破ること大小二十二艘、五穀を失うこと七百四十九石【135立方メートル】余り、田畠を壊すこと多。

97	**元禄３年６月16日　１６９０年７月21日　霧島山　島津国史** 霧島山が噴火し、灰が数日降った。（大山喜右衛門覚書に拠る）　※『県災異誌』が『日本震災凶饉攷』からとする「霧島山が噴火し、降灰が数日に及ぶ.」という記述は『鹿児島県史』年表にあり、『日本震災凶饉攷』や『日本災異志』等にはない
98	**元禄４年５月　１６９１年６月　大雨・鹿児島　鹿児島県史年表** 鹿児島で大雨・洪水があった。
99	**元禄６年５月　１６９３年６月　大雨・鹿児島　鹿児島県史年表** 鹿児島に大雨・洪水があり、粥を施した。
100	**元禄６年６月24日　１６９３年７月26日　大風・種子島　種子島家家譜** 夜、大風で、翌朝辰刻【８時頃】に至って止んだ。この夜、池田浦の漁夫六人が、馬毛島から還るに及んで大風に遇い、舟が沈没。四郎助なる者は、水泳がうまかったことを以て、佐多の立目に上がり、その他は生死不明であった。
101	**元禄９年９月８日　１６９６年10月３日　大風・種子島　種子島家家譜** 夜半から九日朝まで島全体に大風。屋を倒すこと、数え挙げられない。田園を損じ、穀を失うこと千百二十俵余。
102	**元禄14年８月11日　１７０１年９月13日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で（穀を失い）島中が飢饉。
103	**元禄15年10月27日　１７０２年12月15日　大風・種子島　種子島家家譜** （夜半から夜明けに至るまで）大風の浪で、前ノ浦で船を破ること十艘余。
104	**宝永２年12月　１７０６年１月　桜島　地学協会報告** 大隅の桜島山が噴火した。　※『日本災異志』
105	**宝永２年12月15日　１７０６年１月29日　霧島山上　鹿児島県噴火書類（福島厳之助編纂）** 山上から噴火して、神社（六所権現社）堂塔・寺・家が皆、焦土となった。　※『日本噴火志』
106	**宝永４年９月13日　１７０７年10月８日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、田地が多く損壊。
107	**宝永４年10月　１７０７年10月　地震・鹿児島　鹿児島県史年表** 地震・津波があり、鹿児島城が破損した。　※『県災異誌』は『日本震災凶饉攷』からとするが同書では確認できない
-1	**宝永４年10月４日　１７０７年10月28日 津波・種子島北部 種子島家家譜** （南海トラフの巨大海溝型地震である宝永）地震で潮水が大いに溢れ、（西之表市太平洋側の）現和村の庄司浦で人家が十軒、流失した。
108	**宝永６年５月９日　１７０９年６月16日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、牛馬の斃死したもの千百零二【1,102】、家の破損百零三。
109	**宝永６年６月１日 １７０９年７月７日 土砂・姶良市上名　三國名勝圖會** 黒島大明神廟…水が湧いて山が崩れて、神廟が流失し、その時古い記録も失った。
-1	**洪水・加治木　隅陽記** 大洪水、網懸【掛】橋が落ちた、
110	**正徳元年５月27日　１７１１年７月12日　水害・鹿児島　西藩野史** 鹿児島市は、大いに水が出て家屋を流し人を襲った。街路に舟を通した。水が去らないこと一昼夜。人は皆、屋根に上った。粥を舟に準備して戸毎に下さり、飢えから救った。
111	**正徳元年７月22日　１７１１年９月４日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、死んだ男が一人、倒れた家が七百七十一軒、斃死した馬が四十五

	疋。
112	**正徳２年　１７１２年　洪水・吉松　加久藤道本江被召直候節夫立願書留帳（写）** 洪水に（より）川（の流れが）変わり向江村の井手口がお役に立ちません
113	**正徳３年７月12日　１７１３年９月１日　大風洪水・川辺　次渡日帳か** 七月十二日から十三日までの風害は、石高八千五百石余の内千七百三十石位（の田が）荒れ、倒家十一軒、破損堤二ツ、破損井手【取水井堰】三ツ、死馬一頭だった。　※『川邊村郷土誌』
114	**正徳４年　１７１４年　諏訪之瀬島　西藩野史** 薩摩の国の諏訪（之）瀬島が噴火した。
-1	**※前後　空順日記** 一、諏訪之瀬（宝永？享保？）七年【１７１０年？２２年？】の大噴火で、病人は皆々死に果て、（島から）四十里【約150km】の間は魚も傷みました。風下は一夜に灰の降ること五六尺【1.5～1.8m】で、風が吹けば海に吹き込みました。
115	**正徳６年２月18日　１７１６年３月１日　霧島山　霧島山仏華林寺狭野世譜** 雷が鳴り（山が？）震動し、黒烟が忽ち（空に）満ちて、火坑を（霧島山上の金剛・胎蔵）両部之池に転（移）する。
-1	**霧島山　日本噴火志** ※『名勝図会』からとする「夜、霧島山の内、小林と曽於郡の境にある笈掛嶽の北、金剛界・胎蔵界の両部の池の辺りで新たに火口二ヶ所で噴火した。これに依り小林辺りが震動し、高原の内、花堂、松八重川の水が増し、魚が死んで流れた。」は同書で確認できず、『日本災異志』等にもない
116	**正徳６年閏２月18日　１７１６年４月10日　霧島山　古今山之口記録** 霧島山が大いに噴火した。　※『南九州文化』
117	**正徳６年３月16日　１７１６年５月７日　霧島山　古今山之口記録** 霧島山の釈迦之嶽と云う（その）西の方に当たって火口が開き、大いに噴火した。　※『南九州文化』
-1	**霧島山　霧島山仏華林寺狭野世譜** 両部之（池）の両池の（間の）堤塘が裂け壊れ（池が）一つになった。
118	**享保元年８月11日　１７１６年９月26日　霧島山　古今山之口記録** 霧島山が大いに噴火して、当地【山之口】へも一歩【3.3㎡】に砂や灰が一升三合【２ﾘｯﾄﾙ余】降った。　※『南九州文化』
-1	**霧島山　三州年代記** 霧嶋山大噴火。朝七ッ半【５時頃】から五ッ【８時頃】まで、硫黄・汚泥で、高原・狭野原・蒲牟田・櫟原（くぬぎばら）が一尺余【30cm強】降り埋もれました
119	**享保元年９月26日　１７１６年11月９日　霧島山　西藩野史** 霧島山が噴火した。
-1	**霧島山　吉貴公御譜** 日向国霧島山頭の両部池辺り新たに噴火し且つ沸騰し、焼けた噴石や灰が（雨のように）降り、噴石が降った所は東霧島神社・狭野権現社・神徳院及び院中・門前・瀬戸尾権現社及び別当寺、高原・小林（ｵﾊﾞﾔｼ）郷等の民家、山の樹木が悉く灰燼となり、田畑は灰に埋もれた、
-2	**霧島山　島津国史** 霧島山が噴火した。東霧島社、狭野権現社、瀬戸尾権現社、神徳院、及び高原、高崎、小林等の民家や山木が焼けた。福山市民の十一人が瀬戸尾（権現社）に宿泊しており、死者が五人であった。（浄国公旧譜、万代記に拠る。狭野権現は高原郷に在り、瀬戸尾権現は小林郷に在る）

-3	**霧島山　三州年代記** 霧嶋山大噴火。世（間の）人（達は）神火と申しました。この夜、瀬戸尾権現へ福山の者六人が参詣した内四人が石に当たり打ち殺（され）、一人は神子（となり？）行方知れず、残る一人は少々傷を負いましながら、どうにか郷里に帰った。花堂の曖所【地方役場】に勤め居りました飛脚番が、大石に当たり打ち殺（され）、昼七ッ時分【15時過ぎ】（から）六時【５時過ぎ】頃まで、同夜九ッ時分【午前０時頃】から七ッ時【３時過ぎ】頃まで、大噴火。高原の在の（東）光坊の社頭並びに米蔵・材木蔵・門前の全体が焼失し、小池から門前の間、大石（で）二尺【60㎝強】程埋もれ、狭野神徳院の社頭から坊門前の四五ヶ所が焼失した。狭野権現は上【屋根？】葺き替えて遷宮の筈で、御名代として嶋津藤次郎殿が遣って来られましたけれども、早々に帰宅し、高原の地頭の左近允与太夫殿も初め（現）地入でしたけれども、これも早々に帰宅した。東御在所の御神体は八十一代の現住覚焉法印（大和尚位）が守って出し、高原鎮守大明神社内に久しく御安置した。花堂町・祓川は残らず焼け払われ、高原の衆中【郷士】や百姓は方々へ立ち退きだった。庄内山之口の記録に、この時降り埋めました降下物の例を見ると、土地一歩【3.3㎡】に砂石共に六斗四升【115.5リットル】降りましたと云々、鹿児嶋迄までも暗かった。同二十七日にも、噴火は終日に時々あり幾度ということなし【数え切れない】。
-4	**霧島・西峯　三国名勝図会** 西峯の噴火…各神社の社記に見えるところでは、…　中御門帝、享保元年、九月二十六日、また噴火する。この時、高原狭野社・神徳院・霧島東御在所社・錫杖院、小林霧島中央宮・瀬戸尾寺、及び高原・高崎・小林等、民家山林が、皆焼失した。ある書に、東霧島社もこの噴火で焼けたとある。この東霧島社は、今は高城にある。およそ享保元年【１７１６年】からこの歳に至って、大いに噴火し、しばしば熾烈で、噴石が焼けたまま空から落ち、砂石がヌカを篩（ふる）うようで、灰燼が降って昼も夜と変わらず、修行者はムシロを被って遮り傷を防いで、数里の間の田畝を埋没し、草木は焦げ枯れ、往古の火勢はまた推して察するべきだ。　／　霧島山中央六所権現宮…、享保元年甲申九月、復た霧島山上の金剛・胎蔵両池の辺りから火が大いに発し、神社が悉く焼失し、ここは砂石の為に六尺【２メートル】程埋没した。　／　狭野大権現社…また享保の噴火で被災した。　／　霧島東御在所兩所権現社…、当社は、霧島嶽の東腰にあり、…、平地から石段三百六十余級を経て登り、ここから高千穂峯に登山路があって、それほど遠くない。…、当社は、古来、霊蹟が甚だ多いと言えども、山上の火災が起った時に、その伝来品の多くを失った。　／　霧島山仏華林寺神徳院…享保元年丙申九月二十六日から翌二年正月七日に至り、霧島山が噴火した時、狭野権現社及び当寺は、延焼にあい、高原高崎等の諸郷も、民家や山木が皆焼けて、およそ諸県郡の諸村の田園で被災したのが十三万六千三百坪余と記録に見える。　／　霧島山華林寺東光坊錫杖院…、享保の年、霧島山が、また、大いに燃え、この時も寺廟が火災にあった。
-5	**霧島・西嶽　地学協会報告** 夜半頃から霧島の西嶽が震動して、周囲三里半程の所々で噴火・破裂し、その為、その地内に在る山林及び神社仏閣等は悉く焼失し、その他災害を被ったものは、砂や石が入った外城（外城とは一ヶ郷を云う【天明４年に郷と改称する領内の行政区画】）十二が焼失し、家数が六百軒か六百四軒、負傷が三十一人、斃死した牛馬が四百五頭、田畑が六千二百四十町八反六畝十九歩【62平方キロメートル弱＝6,190ヘクタール弱】、被害農産高が

	六万六千百八十二石余（官報）。その後三四年の間、灰が降って恰も春霞のようになったと云う　※『日本災異志』
-6	**霧島山　古今山之口記録** 大いに噴火し、当地へ一歩【3.3㎡】に砂・石併せて六斗四升【約115リットル】降りました。この時、高原の内で神徳院門前並びに宮寺花堂町は残らず、東光坊並びに宮祓川も残らず焼失し、郷の人はそれぞれ立ち退きました。　※『南九州文化』
-7	**霧島山　霧嶋山縁起續禄艸案** この日申刻【16時前】神火が夥しくて暫らくして止んだ。既にまた 戌刻【20時頃】に至り、殊に夥しい爆音はまさに大小の雷のようで、猛炎が高く上り斜めに棚引いて来て山頂を覆い、たちまち焼けた石が雨（のように降り）、この夜寺院が焼失した。　※『宮崎考古』
-8	**霧島山　霧島山仏華林寺狭野世譜** 未刻【13時過ぎ】鳴動が夥しくて、焔火が蒼天を覆い（日を）遮り、同日戌時【19時過ぎ】、また燃え出て、鳴り響く百千の雷霆も喩えようもない。炎焔が靡(なび)いて垂れて当寺（社）の上空を過ぎるや、砂・礫が雨のよう。また焔石の大きいのは車輪と等しい。地に落ちて入る（時）出る時は恰(あたか)も地震に似ていた。皆が狼狽し騒動すること、その有様は（言葉を）以て述べ難い。この時、寺院が焼失した。
120	**享保元年10月21～23日　１７１６年12月３～５日　霧島山　三州年代記** 同十月二十一日から同二十三日まで、時々大噴火があった
121	**享保元年12月26日　１７１７年２月７日　霧島山・新燃　西藩野史** 享保元年…、霧島山が噴火し、十二月二十六日、また噴火した。
-1	**霧島山　島津国史** 霧島山が、また噴火した。灰を降らすこと四日。高原、高崎、高城、都之城、小林、須木、野尻、倉岡、綾、穆佐、高岡等の田畑が皆埋まることとなった。牛馬が多く死んだ。（浄国公旧譜に拠る）
-2	**享保元年12月26日～29日　１７１７年２月７日～10日　霧島山・新燃　鹿児島県噴火書類（福島厳之助編纂）** 霧島山の新燃岳が、この日から二十九日迄四日間、続けて大いに噴火し、高原・高崎・庄内・高城・穆佐・都之城・小林・倉岡・綾・高岡・須本・野尻辺り迄、石や灰が降り、田畠が大きく損失し、人や馬が死に失われた。　※『日本噴火志』
122	**享保元年12月28～29日　１７１７年２月９～10日　霧島山　承寛襍録** 松平薩摩守領内、日向国鶴鳴山【「日本噴火志」が引用の際に置換したとおり霧島山の別名か、特に新燃岳の別名か】が、去年【享保元年】九月から噴火し、震動が止みませんでいましたところ、昨年十二月二十八日、九日【１７１７年２月９、10日】両夜、激しく【頻繁に？】震動し、同国の御代官所の那珂郡、諸県郡十三ヶ村、高一万石余のところ、霧島山から道のり十里【約40km】余ある所へ、焼けた灰・砂利が段々に降り、
-1	**霧島山　三州年代記** 十二月二十八日、霧島が大いに噴火した。高原・花堂の衆中は残らず焼失し、都城の片漆村も焼けた。同二十九日晩、大いに噴火し、高崎の宇賀大明神、梅龍寺、在郷一ヶ所が焼失した。
-2	**霧島山　古今山之口記録** 同年十二月二十八日晩、大いに噴火し、当地まで暗闇になり、灰が降りました。この地【山之口】の飛松辺りへは大石が降りました。この時、高原の花堂の武士方（の地区）は残らず焼け払い、島津筑後殿の領地の片添村

	も焼け払った。その辺りは一二尺近くになる程に石が降りました。砂・灰が共に八九寸から一尺余降りました所もあった。同二十九日晩、大いに噴火し、当地も暗闇になり、小さい砂が降りました。高原の内の鴨【蒲】牟田村や高崎の内の朝倉名辺りの過半が焼失した。　※『南九州文化』
-3	**霧島山　霧嶋山縁起續禄艸案** 正月三日、社頭門、花堂・高松が全て焼失した。前年末二十八日以来燃え出て殆ど止むことなく、殊に二三日は大噴火だった。　※『宮崎考古』
-4	**霧島山　霧島山仏華林寺狭野世譜** また大いに燃え、また翌二十九の晦日、（翌）享保二丁酉（年）元（日の）朝、殊に大きく燃えて、社頭を焼き尽くした。また、同三日、本地堂は（焼けて）炭・灰だ。この後同じく正月七日、猛煙があって、徐々に減じ滅した。砂石が重なり積もること、凡そ二尺【60㎝余】に及んだもんだ。
123	**享保２年正月３日　１７１７年２月13日　霧島山・新燃　承寛襍録** 朝五ツ半時【８～９時】から九ツ時【12時頃】迄闇夜（のよう）になって、大いに地が震え、砂が交った焼けた石が降り積もりまして、田畑・麦作・菜園が埋もれること四五寸【10センチ余】、七八寸【20センチ余】、悉く砂地となり、御代官の室七郎左衛門から注進がありました。
-1	**享保２年正月３日～　１７１７年２月13日～　霧島山・新燃　八丈島年表** 享保二酉年三日辰ノ刻【朝８時】頃から天空が夜陰のように暗闇になった。但し、東西南北の麓は晴天で、島中の郷里の家々の内が暫くの間は暗かった【のは、『日本噴火志』によれば「霧島の噴火の細微な灰が疾風に吹き送られて八丈島に落ちたものであろう」とのこと】。同十日【１７１７年２月20日】申酉【西南西】の方角から小雨のように白い砂が降った【のも、『日本噴火志』によれば「同じく霧島山から来たのではないか」とのこと】。 ※『日本噴火志』
-2	**霧島山・新燃　島津国史** 二年丁酉春正月三日、霧島山が噴火した。（万代記に拠る）。七日【17日】、また噴火し、その後も連日止まなかった。錫杖院及び管下の民家が焼けた。諸県郡の諸村の田園で前後通算で被災したのは十三万六千三百坪余りあったと言う。（浄国公旧譜、万代記に拠る。　錫杖院は高原郷に在る）。 ※白尾国柱の『麑藩名勝考』等は「俗に両郡嶽・『新燃』と云う」
-3	**霧島山・新燃　鹿児島県噴火書類（福島厳之助編纂）** 正月三日、霧島山の新燃が、またまた盛大に噴火し、これ以降七日から十一日まで続けて盛大に噴火し、一帯は噴石により家屋が焼失し、錫杖院の寺や家は残らず焼失し、田畠は石や灰が降って埋まり、牛馬が沢山死失した。高原・高崎両郷の役人達までも方々へ避難しております。昨年十二月二十六日からこの正月十一日まで、度々盛大に噴火し、日向国諸県郡の内の諸所で損失したのは左の通り 田畠十三万六千三百坪余【45万㎡強】に石・砂・灰が入り、（被災石高は）米三万七千九百五十石余で雑穀千五百四十石余、（建物は）神社十一棟、寺家三十軒、寺門前五十三軒、社家二十六軒、百姓家十四軒、死人は男一人、怪我人は三十人、死牛馬は四百二十匹。 ※『日本噴火志』
-4	**霧島山　古今山之口記録** 同二年酉正月三日、大いに噴火し、この辺りは暗闇になり、灰や砂が降り、高原の内の入来名・石ヶ野名・川平名の過半が焼失した。　※『南九州文化』

-5	**霧島山　三州年代記** 正月元日雲、同三日、霧島が大いに噴火し、高原の内の入来名・石ヶ野名・川平名は過半が焼け、高崎の麓の家が十四五ヶ所で焼失した。
124	**享保２年正月６日　１７１７年２月16日　霧島・西峯　隅陽記** 夜になって、霧島山の神火、大いに噴き始め、数日（噴火）、
125	**享保２年正月７日　１７１７年２月17日　霧島・西峯　三国名勝図会** 西峯の噴火…各神社の社記に見えるところでは、…　中御門帝、享保二年正月七日、また噴火した。俗に両郡嶽を新（たな）燃【噴火】と言う。諸県郡の諸村田園、前後通算して被災したのは、十三万六千三百余区と言う。
-1	**霧島山　古今山之口記録** 同七日、大いに噴火し、当地まで大石・小石が降った。一歩【3.3平方メートル】に一斗三升【23リットル余】あった。　※『南九州文化』
-2	**霧島山　三州年代記** 正月七日雲、この日から同二十一日まで、霧島は時々大いに噴火した。七日昼八ツ【２時頃】過ぎ時分になりましては、鹿児島から噴火が光って見えた。同八日夜五ツ【８時頃】時分、噴火が激しくあり、その晩はまさに晴れた（昼間のような明るさの）夜となった。同十日昼四ツ【10時頃】時分から、同十一日九ツ【正午頃】時分から、同二十一日は大いに噴火し、砂石が降った。一時、二時【３、４時間】位づつ間があり、一時か一時半【２、３時間】位づつ噴火しました。正月七日に降った砂や石は、山之口の例を見ると、この前よりは薄い。一歩【3.3平方メートル】に一斗三升【23リットル余】位あったとか云う。この度砂が降りました外城は、高原・高崎・野尻の一部・高城・山之口・都城の一部だった。
126	**享保２年８月２日　１７１７年９月６日　霧島　三州年代記** 霧島の噴火の際は、必ず西風で、光（と鳴）る物が雷のように鳴り渡るに至ります。
-1	**霧島山　古今山之口記録** 大いに噴火し、当地も闇になり、灰が降りました。※『南九州文化』
127	**享保２年８月15日　１７１７年９月19日　霧島　西藩野史** 霧島山が盛大に噴火し、硫黄池から送り【池の水が「逆り」？】、大きな噴石が空に飛び、火映が明々として昼夜絶えず、雷鳴のように音を響かせ、土や灰が近国に飛び、近郷の田を埋めること数十里【数十～数百キロ】。民衆が恐怖して、このことを以って或る者は山の神が怒っていると言い、或る者は神の火と称する。
128	**享保２年９月27日　１７１７年10月31日　霧島・西峯　隅陽記** 霧島の噴火、（八月【９月】からの噴火の中では）特別に大火で、大石が夥しく飛び、夜は（爆発音が）御領国中に鳴り渡りました、
129	**享保３年２月27日　１７１８年３月28日　霧島　三州年代記** 夜、霧島が大いに噴火し、高原・高崎へ砂・石・灰が二寸程降り（一帯を）埋めましたとのことが聞こえました。
130	**享保３年12月27日　１７１９年２月15日　霧島山　島津国史** 三年十二月二十七日、霧島が噴火した。灰を降らすこと数里。高原、高崎が、被災が最も甚だしく、田園が皆、砂土に埋まることとなった。【除去作業について略】（万代記、高奉行所出米帳に拠る。）
131	**享保11年　１７２６年　大雨・鹿児島　島津国史** 享保十二年【１７２７年】、…去年の大雨で、鹿児島城下の東北の土手三ヶ所、堀岸三ヶ所が壊れた。　※『旧記雑録追録』が収録する継豊公御譜中の享保十二年三月補修申付け申請・申付けの文書でも確認

132	**享保13年６月３日　１７２８年７月９日　地震・喜入　喜入町郷土誌　増補改訂版** 地震があり、愛宕神社脇が崩壊したため、土砂が愛宕川（当時は永田川と呼んでいる）を埋め、付近の田地が荒地と化した。
133	**享保14年８月３日　１７２９年８月26日　大風　島津国史** 大風。　※『鹿児島県史』年表は下と併せ８月「大風両度に及ぶ」とする
134	**享保14年８月19日　１７２９年９月11日　大風　島津国史** また大風。(公義書挙帳に拠る。　これより以後、凡そ大風大水については、公義書挙帳に見えるものは書き、そうでなければ書かない。)
135	**元文３年８月５日　１７３８年９月18日　洪水・種子島　種子島家家譜** 夜から（翌）六日に至るまで洪水で、峰が崩れ、谷が穿たれ、田地が荒れ、壊れ、死んだ牛馬が多。
136	**寛保元年７月21日　１７４１年８月31日　大風・封内　薩藩野史** 藩内で大風があり、民家が傾き倒れ、大木の根を抜いた。　※『県災異誌』
-1	**大風洪水・種子島　種子島家家譜** 夜から翌朝に至るまで大風と洪水で、田を損なうこと二千二百六十五石有余、家の破損二千九百九十六（棟)、馬の斃死百十三疋、牛二十一頭。
137	**寛保２年３月２日　１７４２年４月６日　桜島　地学協会報告** 大隅の桜島山が噴火した。　※『日本災異志』
138	**延享元年８月10日　１７４４年９月16日　大風雨・日向　日向国史** １０月大風雨降【？洪？】水あり。領内の損害高２１０町３、７８９石７斗８升、倒れた建物３２７戸、破船９隻、死人８名、佐土原の被害が殊に甚しく、倒れた建物３００余戸、死者４３名を数えた。　※『県災異誌』
-1	**鹿児島　三州年代記** 八月七日朝辰刻【８時頃】、地が震えた。同十日、大風で鹿児島の所々も（雨が）降りました。
139	**延享３年２月25日　１７４６年４月15日　洪水・種子島　種子島家家譜** 洪水で、中之村の田地や田畑の間にある溝が、多く損じた。
140	**延享３年８月23日　１７４６年10月７日 大風高潮・種子島 種子島家家譜** 戌時【午後８時頃】から（翌日未明）寅ノ時刻【午前４時頃】まで、大風・大潮【高潮】で、田二千百六十石余分、畦道七百五十五間を崩し、家を流すこと八棟、家を倒すこと五十八棟、家を損じること百零五棟、厩を破ること三百二十、或いは斃死し或いは流された牛馬は二十五疋で、船を破ること大小三十三艘。
141	**寛延元年８月　１７４８年９月　津波（高潮）・串木野　神社仏閣調帳** 【串木野】羽島村之内塩泊海辺 一　羽島崎大明神 海辺に造営した社であり、寛延元年八月の津波の際に諸品が流出に到ったということを言い伝えている ※　【串木野】下名村之内島平寺島 一　松尾大明神 一　獅子駒二つ 一　鰐口無銘 一　具足 一　刀 右二行の宝物は寛政元【一七八九】年の津波の際に流失したとのこと
142	**寛延元年９月２日　１７４８年９月24日　海笑(嘯)（高潮）・市来　三国名勝図会**

	当地に津波が来て、陸地に上った。その時、【湊町の】地頭館内に収蔵していた旧記等が、全部喪失したために、往古の事蹟について詳細にわからないことが多いという。
-1	**大風・高潮　市来・串木野　三州年代記** 晩六ツ【６時頃】時分から大風が吹き出し、戌亥刻【９時頃】盛んになった。新屋敷・樋之口・山之口馬場まで潮が大いに溢れ出し、井戸水に塩が入り、久しく塩辛かった。且つ、薩摩半島は大潮で、市来の湊・串木野の海辺は、家が流れ各所が破損し、両所共に死人が多かったとのことです。
-2	**暴風雨・大波浪　坊津久志　西南方村郷土史／鹿児島縣維新前土木史** 大暴風雨で大波浪があり、そのために防波堤が全部崩れ、人家の倒壊て四十余戸、その中で全部潰滅したものが二十有余軒に及んだ。／台風のために海岸構造物が悉く破壊され、人家の二十軒倒壊・二十軒半壊の惨状を呈した。
143	**寛延元年10月13日　１７４８年11月３日　竜巻・鹿児島　三州年代記** 一、十月十三日戌刻【午後８時頃】頃、雷がものものしく、風雨が激しく、上【城下北部の】城ヶ谷から辻風が荒々しく吹き起こり、その一筋は盤石も吹き起します程の風で、家なども半分に吹き切ります程だった。茅葺の家などはそのまま馬場に吹き（上げ・）落し、あちこちが破損した。不断光院・浄光明寺・大龍寺・後迫の辺りまで一筋の風で、（風の通り道の）脇は痛みませんで、世間は（全体的に見れば）それ程の風でなかったです。
144	**寛延２年　１７４９年　大風水害　鹿児島県史年表** 八・大風水害　九・大風水害　十・大風水害あり
145	**寛延２年７月２日　１７４９年８月14日　洪水・種子島　種子島家家譜** 洪水で、茎永村・平山村の田地が、多く破壊。
146	**寛延２年８月　１７４９年９月　桜島　日本噴火志** 【寛延２年】己巳八月、向島野尻村の上の太平山が噴火した。　※『県火山志』によると桜島の池田新兵衛家蔵の年代記から
147	**宝暦元年２月12日　１７５１年３月９日　洪水・種子島　種子島家家譜** 洪水で、田地の間にある溝が、多く破損。
148	**宝暦２年４月15日　１７５２年５月28日　洪水・種子島　種子島家家譜** 洪水で、下之郡の田地が、多く破損。
149	**宝暦２年８月９日　１７５２年９月16日　大風洪水・薩摩国　島津国史** 大風（雨で）洪水。（公義書挙帳に拠る。）
150	**宝暦３年５月17日　１７５３年６月18日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、島中で家を倒すこと七軒、家を破ること五十五軒。
151	**宝暦３年６月18日　１７５３年７月18日　大風・薩摩国　島津国史** 大風。　※『鹿児島県史』年表は６月に「大風水害あり」とする
152	**宝暦３年６月29日　１７５３年７月29日　大水・薩摩国　島津国史** 大水。（公義書挙帳に拠る。）
153	**宝暦５年７月13日　１７５５年８月20日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、十五日に至って止む。多く田畠を損壊し、船一艘を破り、倒家二十六（棟）損家百二十七（棟）。
154	**宝暦５年８月24日　１７５５年９月29日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、倒家二十六。
-1	**大風　加治木　隅陽記** 八ツ時分【13時半頃】から大風、二十五日晩【暁？】七ツ【午前３時頃？「夕七ツ」は16時頃】まで（で）吹き止む、

155	**宝暦６年　１７５６年　桜島　地学協会報告** 大隅の桜島山が噴火した。　※『日本災異志』
156	**宝暦６年８月　１７５６年８月　桜島　桜島上山年代記** 向島の横山で温泉が涌出した。　※『桜島大正噴火誌』。同書によれば『大日本山岳志』に「大隅国桜島の噴火」の由
157	**宝暦７年３月７～８日　１７５７年４月24～25日　大雨・宮之城　湯田旧塘の碑** 両昼夜は大雨に及び、暁には水が忍び押し寄せ、堤が崩れること二十六間【47ｍ】余。転がり込んだ大岩や土石が散乱して、麦田二町六反【2.6ヘクタール】が一瞬の間に埋没した。（堤防の）崩壊の音は激しい雷のようで数里【数㎞範囲内】で聞こえた。…子【１７５６年】冬から丑【１７５７年】春まで、氷雪が頻繁であって、柔らかに土を穿ち堤を穿ち洗い流し、急の雨が迫り荒廃させた。
-1	**洪水　加治木　隅陽記** 七日【４月24日】から八日朝、洪水、網懸【掛】橋が傷みました、これに因り補修（工事）がありました、
158	**宝暦８年７月19日　１７５８年８月22日　大風・山川ほか　三州年代記** 申ノ初刻【？午後４時頃までの早い時間？】に至り、大風が吹き起き、激しく、夜に入る時分に吹き止みました。鹿児島中で破損が多かった。この大風は山川の辺りで激しく、他国では吹きませんでしたとのこと。
-1	**大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、田地・家屋が多く破損。
-2	**大風　加治木　椿窓院殿供養塔** 強く激しい風が暴れ起こり、林木が皆ことごとく抜け、古樹の一枝がたまたま（椿窓院妙英大姉を供養する）霊塔を折った。
159	**宝暦10年１月19日　１７６０年３月６日　地震・鹿児島　三州年代記** 朝六【６時頃】時分、激しい地震がありました。
160	**宝暦12年７月９日以前　１７６２年８月28日以前　大風・九州　続史愚抄** 最近、九州で大風があったと云う。（年代略記）
161	**宝暦13年３月　１７６３年４月13日～５月12日　諏訪之瀬島　隅陽記** （トカラ列島）七島の内諏訪之瀬（島の御岳）が噴火し、島全体の人（達）、皆思い思い（中之島等か）脇の島へ逃げた、
162	**明和元年３～４月　１７６４年４～５月　洪水・種子島　種子島家家譜** 大いに雨降る。洪水で、田地が多く破損。
163	**明和元年６月26日　１７６４年７月24日　洪水・徳之島　徳之島面縄院家蔵前録帳** 大洪水で三つの間切【琉球王国時代からの行政区分】の御田地の被害が大きく永久損壊地（区分）に入った、
164	**明和元年８月11日　１７６４年９月６日　大風（竜巻？）・鹿児島　三州年代記** 未下刻【午後３時頃】から大風。辰巳【南東】から吹き起こり北風といって申刻【午後４時頃】吹き止んだ。世間では竜巻ではないかと申しました。鹿児島中のあちこちで破損が多かった。
165	**明和３年４月12日　１７６６年５月20日　洪水・桜島　櫻島上山一氏藏年代記** 桜島の高い山から洪水が起きて、野尻村、赤水池の境、川原の堤を切って、野尻村の畠に大分損害を生じた。それから、川原が三間【約5.5メートル】広がった。　※『県火山志』

166	**明和３年４月28日　１７６６年６月５日　地震・桜島　日本噴火志** 「夜明けに音が鳴り大地震があり、間を少しづつおいて小地震で三度揺れた」。　※『県火山志』によると桜島の上山一が蔵する年代記から
167	**明和３年６月21日　１７６６年７月27日　地震・桜島　日本噴火志** 「同六月二十一日（太陽暦七月二十七日）夜八つ時頃迄（午後十時頃）鳴ること九度、地震で七度揺れ、その内二度は大きく震えた」云々。
168	**明和５年１月26日　１７６８年３月14日　霧島・硫黄山　飯野町郷土史** （噴火の）場所は（現えびの市東部の）飯野の（南端に当たる）山腹【えびの高原・硫黄山周辺】であって、延長二丁ばかり【約二百メートル】横五十間【百メートル弱】も御座いましょうか、大変に（強く）震動致しますとのことをお聞き及び申しております。… 一、噴火の状況を、（二月二十七日【１７６８年４月14日】に飯野へ）出羽守がやって来ました頃、加久藤【飯野の西側】から見分しました際は、黒煙がすさまじく巻き上り、甚だ火勢が強く見えました。しかしながら三月三・四日の頃から、煙が変わって薄く見えてくるようになりました。 一、出羽守が飯野へやって来ました際は、加久藤での皆々の話に、この度の噴火について、加久藤の内三ケ村に（噴煙が）掛かりました。溝の流れに降灰が（入り込み）下り、特に田畑の障害になり、現状のままでは、三ケ村に千五百石【米3,750俵225トン程度】の損害になるとの話でした。しかしながら出羽守が帰って参ります際【１７６８年４月30日】の話では、噴火もこの間と（比べ）格別に縮まり、水も清いですから、植え付け等の支障もありますまいと申すことでした。この水道は（西川北菅原神社がある、えびの市北西部）馬関田までも懸かり通る溝です。この溝は大川筋ではない。上流は、この度の噴火の場所近くから流れ出ています小溝です。灰の沈みます（具合）は、厚さ一寸【３センチメートル】余りの溜まりがありますと、田地に種子を蒔きましても、硫黄や灰の気で痛み切れて、（苗が）生じかねますから、外の村の田地を借りまして種子を蒔きます。けれども現況のままであれば、段々治まり、そのような事態にも及ばないだろうと、農民を始め皆喜び申すこととの話でしたこと。
169	**明和６年８月１日　１７６９年８月31日　大風　三州年代記** 大風のため、田地十万石以上が税免除となったとのことです。
170	**明和８年７月～９年　１７７１年８月～１７７２年　霧島・西峯　三国名勝図会** 西峯の噴火…各神社の社記に見えるところでは、…　後桃園帝、明和八年から翌年【１７７２年】に至って、また噴火した。およそ享保元年【１７１６年】からこの歳に至って、大いに噴火し、しばしば熾烈で、噴石が焼けたまま空から落ち、砂石が糠〔ぬか〕を篩〔ふる〕うようで、灰燼が降って昼も夜と変わらず、通行人は筵〔むしろ〕を被って遮り傷（つくの）を防いで、数里の間の田畝を埋没し、草木は焦げ枯れ、往古の火勢はまた推して察するべきだ。　※白尾国柱の『麑藩名勝考』は「明和八年辛卯七月、翌年壬辰に至り、また、噴火する、」とする
171	**明和９年　１７７２年　霧島　薩隅日地理纂考** 明和九年の噴火でも、諸県郡の諸村では民家や田園が被災すること十三万六千三百区であったという。
172	**安永３年７月14日　１７７４年８月20日 大風洪水・種子島 種子島家家譜** 大風・洪水で、田地が多く損じ、百五十二家を転倒した。
173	**安永３年月日　１７７４年月日　大風洪水・種子島　種子島家家譜** 夜、大風で、糸荷船（官が琉球に船を遣り、異国産の物を載せて来る。こ

	れを糸荷船と言う）や台所船（久芳【？】貨物を載せ、他所に運漕する。これを台所船と言う)、その他大小十六艘を、赤尾木港で破った。
174	**安永６年夏秋　１７７７年夏秋　大風・徳之島　鹿児島県史年表** この夏から秋にかけて、徳之島で大風が数度あった。
175	**安永７年秋　１７７８年秋　大風・諸外城　鹿児島県史年表** この秋、大風が二度あり、諸外城の永損が多くて普請人夫が数万に及ぶ。
176	**安永７年７月９日　１７７８年８月１日　大風・種子島　種子島家家譜** （翌）十日に至るまで大風で、倒家七十二（棟)。事を、官に告げた。
177	**安永７年８月７日　１７７８年９月27日　津波（高潮）・沖永良部島　沖永良部島代官系図** 大津波が有り、弁財天の石垣並びに上仮屋の石垣を打ち崩し、（水が）仮屋の床下から三、四尺程【１ｍ程度】上がり、仮屋内に二、三尺程【70～80㎝程】上がりました。大魚数匹が（打ち上げられ）見られました。
-1	**安永７年８月７・８日　１７７８年９月27/28日　大風・奄美大島　大島代官記＜大島私考＞** 大風が二度、八月七・八日に大風があって、高蔵が三百三十六倒れ、馬が二頭死んだ。板附船【奄美伝統の小型の木造船】が二十八艘流失した。
178	**安永８年９月29日～　１７７９年11月７日～　前震・桜島　続日本王代一覧** 安永八年巳【己】亥九月二十九日から、薩州鹿児島の沖にある桜島で大きな地震がおき、桜島の南岳から火焔が出て、溶岩が散乱し、熱い砂・泥・土を湧出して、大きな噴石が火勢に乗じて四方に飛散し、田畠を潰し、家宅を焼失した。人民の死亡者は凡そ一万六千余人であった。十月中旬に至って、火焔が漸く消滅した。
-1	**前震・桜島　種子島家家譜** 九月二十九日から十月一日まで桜島及び海中が大いに噴火した。（二十九日は、我が地の乾【北西】の方角で黒煙が天に高く立上り、地が震えて鳴ること雷のよう。十月一日の朝に至って、灰を降らすこと雪のようで、積もること二三寸【７～９センチメートル】位だった。）（桜島の）北東の方角に島が湧き出たのが七つ。
179	**安永８年10月１日～　１７７９年11月８日～　前震・桜島　桜島池田氏蔵年代記** 安永八年亥九月二十九日夜に入り八時頃から地震が起き、翌十月一日十時頃までやむことがなく、十一時頃から嶽白水の後方でしたが、権現宮の方向に煙が見え始め、午後二時頃から有村の上の燃ノ頭の辺りから黒煙が何千メートルも上がり、間もなく高免村の上の瓶掛の辺りから噴火した。…【沖の島については略す】…十月一日炎火が上がり、大石・軽石・砂灰を巻上げ、降ること五日に及び、高免村から古里村までの人達は、谷山・喜入・今和泉・垂水・牛根・福山・国分の小村へ次々に逃げ、湯ノ村から白浜村までの人達は、最寄の鹿児島磯・脇元・重富へ逃げ、前平には十月七日・八日頃から帰宅した者もあったが、火口に近い白浜村・湯ノ村には帰り難く、十月中旬までも帰れなかった。遠い地方へ逃げた人は、そこで食事が提供され、以後日用品や米が支給された。古里村から高免村まで住家が焼失したため、元の集落に住むのは難しく、鹿児島の砂糖蔵内に仮設小屋を設け、出米蔵の内空いた蔵六棟に収容され、瀬戸村については上築地の池田庄右衛門の空いた屋鋪に小屋が三棟でき、松岡伊右衛門の屋鋪に仮設小屋が一棟でき収容された。【避難者支援略】避難者数は二千三百三十四人、衆中が四百三十五人、うち上男百九十八人、下男四十四人、上女百五十五人、下女三十八人、社人三十九人(男二十一人、下女一人、女十二

人、下女一人)、百姓が千八百六十人、ほか死者百四十七人（うち二十四人は衆中方で、上男九人、下男三人、上女十一人、下女一人。百二十一人は百姓方で、男六十一人、女六十人）　※『旧記雑録』

-1 **前震・桜島　重豪公御譜**

同年十月一日、桜島が、地を震わせ火を発し、直ぐに熾烈な焔が空を満し砂や石が谷を埋めた。余は、直ちに担当に命じて舟数十艘を用意し民を載せ、各地の城下に到った者が数千人、【避難者支援略】しかし、噴火の方は、巨石を飛ばし岩山が崩れ、その勢は甚しく猛烈で且つ急激で、そのため島民は頭を焦がし額を焼けただれさせ肋骨を折り歯を摺り、倒れ、且つ渓谷の間で死んだ者も多くいると云う。　※『旧記雑録』

-2 **前震・桜島　桜島燃上記**

安永八年己亥九月二十九日夜から十月一日にかけ、鹿児島城下及び南北数十里の間で、地震が頻発した。午後二時過ぎ頃から、鹿児島の東側にある桜島の山頂部から噴火し大爆発し、噴火すれば地震が起き、地震が起きたら噴火し、相応するように、また、互いに刺激しあうようだった。噴煙が出て太く束となり大きく何筋にもなった。溶岩が沸き立つ様子は激しい波浪のようで、盛り上がる様子は重なる山並みのようで、どんどん増え高くなり何メートルにもなり、どんどん広がり伸びて何キロメートルにもなり、その輝きは烈しく天を赤く焼き、煌々と海を照らして海の底まで明るくし、星は暗さを恥じて出てこられず、魚は姿が見えてしまい逃げられない。火山雷が縦横に走り光る。流星のように火山弾を飛ばす。雷鳴が山を震わすように地鳴りがする。風波を立てるように爆発音が空気を震わす。高い山が崩れて岩が深い谷底に落ち、渓谷の地が割れる。おおよそ一昼夜、見たこともない異様さは名状し難く、情況が変転して理解し難く、見ているとめまいが起きそうで、聞いていると耳を聾するようであった。このような状況五日を経て、その後ようやく静まり、しかし噴火の勢いは未だ急には治まらなかった。ときに半日経って噴火し、ときに一日二日おいて噴火し、噴煙は一旦止んだり、また立ち登り、地鳴りも止んだり、また鳴り響いた。また、島の北東五六里の海底から噴火した。その鳴動は日夜響いて止まず、海上に俄に中洲が現れ、海抜二丈【６メートル】余り、周囲半里【２キロメートル】くらいであったろう。おおよそ一月が経ってすっかり落ち着いた。ここに至って桜島の形状は、突出したところも平らになり、高く盛り上がった所は窪んで、もう以前のようではなくなった。

対岸の鹿児島の人達は、初めて噴火が起きるところを見て、人々は皆慌てふためいて、じっと座っていられなくて、食事をしても味もわからないくらいで、荷物を持って着替えをして外に出て、互いに驚き合って、ある者は溶岩が流れて来ると言い、ある者は火山弾が飛んで来ると言い、ある者は津波が押し寄せると言い、流言蜚語は様々に飛び交い人々はどよめき騒いだ。やがて鹿児島城下に火山灰を降らした。灰は、風に乗り舞い乱れ地を覆い、青瓦赤瓦も白くして積もり、青松も緑の竹も急に花をつけたようで、それだけでなく戸から室内に入り、畳の目に集まり食器に落ち飲食物に入り混じった。そして道行く人は傘を広げ笠を被るが、顔面を叩き目に入り、すっかりうんざりさせた。それでも季節は丁度冬に向かい、日夜北西の風が多く東南の風が少なく、このため城下に灰を降らすことは、まだ幾らか少なかったようで、反対側の垂水・牛根・福山等の村々の風下に居る者には、灰を降らすこと砂を篩（ふる）い落とすようで、噴石を飛ばすこと石礫（つぶて）を投げるようで、丘や畝（うね）を見えなくし、溝や水路を埋め、蔬菜を枯らし、草木を傷めるに至った。そして湾内十余里【数

十キロメートル】の間には軽石があちこち凝集し、厚さ六尺【２メートル近く】程、周囲半里【２キロメートル】程になるものもあり、このため舟の往来を絶ったという。そして桜島に至っては、地震が他所の十倍もあり、室内に居ても丁度ブランコに乗っているようで、庭に出れば出たで海に漂うようで、寝た途端に寝返りをうち、立った途端に転倒する、動こうとして踏ん張って固まる。その不自由は最早言い尽くせないものがある。そして噴火が起きるに及んでは、噴石が落ちること霰（あられ）のようで、少しの間に積もり、五六丈【15～18メートル。丈でなく尺なら１～２メートル】に至る。灰の降ること雨のようで、暫くの間に深さ二三十尋【30～50メートル。尋でなく尺なら６～９メートル】に至る。飛ぶ鳥も翼を折り、走る獣も蹄を傷め、身軽な猿も枝から墜ち、老馬も道を見失う。これに加えて黒煙が湧出し上下に充ち、四方に塞って、暗く濛々と陰り砂漠のようになり、ここに至って人々は、座った者は起てず、立った者は走れず、ある者は押し潰されて死に、ある者は打撲で死に、ある者は埋まって死に、それら以外でも、ある者は舟を争って海で溺れ、ある者は方角を見失って溝や谷に落ち、ある者は路上に転倒し、ある者は山間に飢餓し、数日の後に及んで各戸を点検したところ、島民の死者は総数百四十余人であり、鶏犬牛馬の死んだものに至っては枚挙に暇がない。そして北東海上七八里【30キロメートル】の間には、魚の死んだものが無数にあり、おそらく海底の噴火の為に傷つけられたものと言われた。藩中の噂話で、ある処に屍があり頭が焦がれ額が焼け爛れており、ある処に屍があり肋骨腰骨を折り歯をうち欠いており、ある処に屍があり既に肉片となり、ある処に屍があり殆ど腐敗している。ある湾岸に漂着した屍は小児であり、ある色の産着を着ており、ある湾岸に漂着した屍は婦人であり、ある色の帯を締めていた。むごたらしく傷ついた様子の酷さは聞くに堪えない。ああ、今日という日は何という日なのか。罪の無い民をこのような惨状に至らしめた。しかしながら、桜島に十八村あり、そして噴火が起きたのは正に古里村・有村・脇村・瀬戸村・黒神村・高面村の上に当たる。だから六村の民に死者が多い。その外十二村の民は、やはり被災を免れた者が多い。そして鹿の類は、海を泳いで鹿児島の北の方・吉野に至ったものがあった。そして噴火の日に　重豪公が命じて速やかに船舶数百隻を出し、次々に島民を渡し、このために老人を助け、幼児を伴って避難した者が二千余人であった。【避難者支援について略】　※『旧記雑録』

-3 **前震・桜島　三国名勝図会**

安永八年癸【己】亥十月一日【１７７９年11月８日】、桜島岳が大爆発し、噴火した。初め九月二十九日【11月７日】、亥の上刻【21時頃】から、数十里四方で、地震が烈しく起こり、翌一日巳午の刻【午前11時頃】に至って、島中の井戸が悉く沸騰して、所々で水が噴出した。また、海水が紫色に変わって、未刻【14時頃】に至って、山上の両中【頂上に三つの池があり、南岳にあるのを白水と名づけ、北岳にあるのを御鉢と名づける。白水・御鉢の中央、凹地にあるのを両中（フタナカ）という。】から俄に一筋の黒烟を吹き出し、暫くして大いに鳴動して、東西両所が同時に噴火した。噴火すれば地が随って震え、地が震えれば益々噴火して、砂や石を飛ばし、泥土を流し、黒煙が空を覆い、白日が真っ暗になり忽ち暗夜のようで、初めに煙が出るや、沸騰すること大波のようで、盛り上がること積み重なる山のようで、益々多く益々遠くまで、何キロ先までか分からないくらい、遂に白日が暗夜のように変わり、その光の耀くや、烈々として天を焼いて遙か高くまで紅色となり、煌々として海上を照らして、遙か広く悉く明るくなり、

その焔が閃すことは、雷電が縦横に走るようで、噴石を飛ばすことは、流星が上下するのに似て、その空震は百千の雷鳴に比べられ、その音が轟くのは烈しく鳴る烈風も及ばず、山岳も悉く崩れようとし、地軸もたちまち砕こうとする。おおよそ昼も夜も、情況がどんどん変転して名状できず、このような状況五日を経て、噴火が漸く落ち着いてきたが、未だ急には止まず、数時間が過ぎて噴火したり、距離を隔てて噴火し、噴火しては止み、止んではまた鳴る。また、東北五六里【？町（百ｍ強）？】の海底から、噴火の響き、ゴロゴロと止まず、海上に俄に洲が幾つか沸き出し、別条に記すのでここでは略す、およそ一月を経て、漸く治まった。ここに至って桜島の形状は、突出したところも平らになり、高く盛り上がった所は窪んで、もう以前のようではなくなった。
初め鹿児島城下の人達は、噴火が起こるのを見て、ある者は溶岩が流れて来ると言い、ある者は火山弾が飛んで来ると言い、ある者は津波が押し寄せると言い、流言蜚語は様々に飛び交い人々はどよめき騒いだ。既にして鹿児島城下に灰を降らすこと、風に乗り舞い乱れ地を覆い、人家の畳も食器も全部この為に汚れ、顔面を叩き目に入り、すっかりうんざりさせた。ではあるけれども、桜島は、城下の東にあって、この時は日夜、西風・北風が多く、そのため城下に灰を降らすことは幾らか少なく、垂水・牛根・福山等の村々で風下にある者には、灰を降らすこと砂を篩（ふる）い落とすようで、噴石を飛ばすこと石礫（つぶて）を投げるのに似ていて、丘や畝（うね）を見えなくし、溝や水路を埋め、五穀・草木を傷めるに至った。風下にある湾内数里【数十㎞】の間には、あちこち軽石が凝集して、厚さ六尺【２ｍ近く】、周囲半里【２㎞】程になるものがあり、舟の往来を絶った。その軽石の上を歩き海を渡って、垂水に至った者があると言う。
また桜島に於いては、地震が他所の十倍もあり、立ったら転び、動こうとしたら踏ん張って固まる。噴火が起きるに及んでは、噴石が落ちること霰（あられ）のようで、少しの間に積もり、五六丈【１～２ｍ】に至る。火山礫・灰の降ること雨のようで、暫くの間に深さ二三十尋【30～50ｍ。尋でなく尺なら６～９ｍ】に至る。これに加えて黒煙が湧出し上下に充ち、四方に塞って、島民のある者は押し潰されて死に、ある者は打撲で死に、ある者は埋まって死に、それら以外でも、ある者は舟を争って海で溺れ、ある者は方角を見失って倒れた。数日後に、各戸を点検したところ、島民の死者は総数百四十余人であり、負傷者は枚挙に暇がない。雞犬牛馬の死んだ数は、推て知るべしである。そして北・東・南の海上七里【30㎞弱】の間には、魚の死んだものが無数にあり、おそらく海底の噴火の為に傷つけられたものと言われた。桜島の噴火口は、正に湯之村【古里村】・有村・脇村・黒神村・高面村の上に当たる。だからこれらの村の住民が多く死に、その外の村の住民は、被災を免れた者が多い。
噴火が起った日　藩公が命じて速やかに船舶数百隻を出し、島民を渡し、このために老人を助け、幼児を伴って避難した者が二千余人であった。【避難者支援について略】後日、大坂の人が言うには、安永八年十月二日【噴火翌日１７７９年11月10日】、大坂に砂灰が降った。人々は大いに怪しんだ。丁度丹後浦島の人が来て、丹後の浦の海辺に夥しく軽石が寄って来た。これは海の中の島の噴火であろうと言っていたところ、果して桜島の事を聞いて納得した。その頃は、本藩では、毎日西風が吹き続けていたから、このように速やかに砂や灰を大坂まで降らせたのであろう。　／　【燃崎の】一つは向面村にあり、安永八年十月の熔岩で、島民は新燃崎と言う。一つは有村にあり、これもまた同時期であるので、新燃崎と言う。　／

	【福山野牧場苑について】安永八年、桜島炎上の時、その地が砂灰に埋れて、水や牧草がなくなり、馬を放牧することができなくて、その牧場を廃止した。　／　【末吉野牧場苑について】安永八年十月、桜島が噴火して砂石が降ったために災害を受け、よってこの苑を、天明元年、福山野牧場苑に統合した。
-4	**桜島（沖）　続史愚抄** 安永八年十月二日壬子【桜島噴火翌日１７７９年11月9日】、最近、伊勢以下の諸国で灰が降り、浅く深く積もった。これは薩摩の桜島の噴火に因って及んだものである。（愚紳、年代略記）三日癸丑、去る一日から、薩摩の桜島は、上空が暗くなり、昼夜震動し、海底から硫黄の精（熔岩？）が激しく発し、蒼い海が火の海に変って、忽然と数島が湧き出した。桜島の人民や禽獣は大半が死に、灰が降り樹竹や人家を埋め、僅かに今日、空の色を見たと云う。（愚紳、年代略記）
-5	**桜島（沖）　安永桜島噴火史料** ※桜島炎上記も含め、多数大量につき別冊
180	**桜島（沖）　桜島池田氏蔵年代記** 安永八年亥九月二十九日夜に入り八時頃から地震が起き、翌十月一日十時頃までやむことがなく、十一時頃から嶽白水の後方であるが、権現宮の方向に煙が見え始め、午後二時頃から有村の上の燃ノ頭の辺りから黒煙が何千メートルも上がり、間もなく高免村の上瓶掛の辺りから噴火した。高免の沖に島が二つ涌出し十一月六日夜に島が一つ出た。同十二月十一日の晩に島が一つ湧出し段々に高く広くなり、　※『旧記雑録』
-1	**安永８年10月14日～　１７７９年11月22日～　桜島沖　三国名勝図会** 安永八年癸【己】亥十月…、東北五六里【？町（百ｍ強）？】の海底から、噴火の響き、ゴロゴロと止まず、海上に俄に洲が幾つか沸き出し、　／　新島（シンシマ）　向面（カウメン）村の前にあり、島が凡そ五つ。安永八年己亥十月…、十四日、一島が涌出した。向面村からの距離三町【300ｍ強】、南北五十七間【約百ｍ】、東北五十間【約90ｍ】、高さ一間三尺【2.7ｍ】位、その翌年七月一日【１７８０年７月末】、水中に没して、今は見えない。これを一番島という。十五日にまた一島が涌出した。一番島から東の方に距離一町十六間【140ｍ弱】位、向面からの距離四町半【490ｍ】猪位にあり、岩島である。これを二番島という。俗に猪子島と称する。己亥年の十月【１７７９年11月】、できたからである。十一月六日夜、また一島が涌出した。二番島から南南東の方に距離十五町【1,636ｍ】、向面からの距離三十町【３千ｍ強】位にあり、これまた岩島である。これを三番島という。十二月九日夜、また一島が涌出した。三番島から南の方に距離六町【655ｍ】位、向面からの距離二十三町【2,509ｍ】位にあり、これまた岩島である。これを四番島という。三と四の両島は、硫黄の気があり、よって俗に硫黄島と称する。
-2	**桜島沖　桜島炎上記** また、島の北東五六里の海底から噴火した。その鳴動は日夜響いて止まず、海上に俄に中洲が現れ、海抜二丈【６メートル】余り、周囲半里【２キロメートル】くらいであったろう。　※『旧記雑録』
181	**安永９年４月８日～　１７８０年５月11日～　桜島沖　桜島池田氏蔵年代記** 翌年四月八日にも島が二つ涌出した。白砂島である。　※『旧記雑録』

-1	**海嘯・桜島沖　三国名勝図会** 九年庚子四月八日【１７８０年５月中旬】、また二島が並んで涌出した。五月一日に至って、自ら合体して一島となった。四番島から南西の方に距離十四町【1,527m】強、向面からの距離十二町【1,309m】位にあり、これを五番島という。今俗に安永島と称する。六月十一日、また一島が涌出した。五番島から北東の方に距離十四町【1,527m】強、向面からの距離十町【1,090m】位にあり、これを六番島という。九月二日、また一島が涌出した。六番島の北東の方にあり、これを七番島という。十月十三日【１７８０年11月上旬】、また一島が涌出した。七番島の南東にあり、これを八番島という。後に七と八の島は自ら合体して一島となった。また、その後六番に合体して、三島が連なって合体し、自ら一島となった。よって併せて称して六番島という。漁民が釣糸を垂れると魚を得ることが最も多く、俗に惠美須島と名づけた。 初めの噴火から一年の際、海底に鍛冶のような音があり、海潮が沸騰して、砂を飛ばし、泥を降らし、或いは泥を噴出し、石を噴出し、或いは三日を経て、或いは五日を過ぎて、出たり没したり不安定で、巨岩が崩れて細石に変転し、泥砂が集まって洲崎に変化し、その状態が安定しない。それら一島が涌出する時は、必ず泥砂が渦巻き上り、波濤が怒号し高く聳えて山のようで、その高さ三四丈【約９～12m】に至り、倒れて人家に迫るので、島民は畏れ避ける、これを海嘯という。一定期間を超過して、炎気が漸く落ち着き、五島が全容を成した。つまり、その二番・三番・四番・五番・六番の五島を、併せて新島と名づけた。その中で五番島が最大であり、その周囲は二十町【２㎞強】、高さ六丈【18m強】あり、草木が生え、水が迸(ほとばし)り出ている。寛政十二年閏四月【１８００年５月前後】、鹿児島城下から島民六戸を、この島に移住させた。今、向面の海底を測ったところ、深さ凡そ八十～九十尋【120～160m】あり、このような海底から諸島が涌出するということは、自然の力は、真に不思議と言うべきであろう。
-2	**津波・桜島沖　桜島燃見聞書** 七月六日、福山町の海辺に津波が来て住家が住み難くなった状況があり、家が浮き、引き流されましたとのことでした。浜市方では、同地へ波が掛かり、稲が傷みましたとのことを聞きました。同十五日にも津波が来ましたけれども、昼の干潮でしたから、（稲が）傷まなかったとのことでした。右六日の日は、国分の内の浜市、小村、牛根、浮津で被害が大きく、その外、内場の海辺すべて被害を受けましたとのこと。その後も少しづつ、津波が来たとのことでした。これは、海底から噴火しました時、その勢いで波が来るとのことでした。　※『安永桜島噴火史料』
182	**安永９年６月　１７８０年７月　桜島　重豪公御譜** 先に御届け申し上げていた私の領地の桜島は、噴火して、収まってきましたけれども、今もって鎮まらず、近くの町に砂・石・灰を降らせ、田畑が使えなくなり難儀しておりますので、早速、砂揚げ人夫を大勢雇いましたが、右の通りで馬の餌の草等に灰が掛かり、先に御届け申し上げた後、先月初め迄に死んだ牛馬が多く、且つ献上してまいった蜜柑の木並びに国【藩の公】用の櫨の木の被害等、　※安永９年６月26日（１７８０年７月27日）付け届出～『旧記雑録』
183	**安永９年８月11日　１７８０年９月９日　浪・桜島沖　桜島上山一氏藏年代記** 同八月十一日夜九つ時分【12時頃】でありましたが、噴火し、遠く炎が上がった。初めて噴火したのと変わらず、噴煙が何キロメートルとなく（上

	がり)、煙の内に火山雷が光り、且つ大きな音がした。初めて噴火すると同時に浪が上がること三丈【９メートル】ほど、小池浜辺りで二丈【６メートル】ほど。白浜村の者達を逃がそうとしたところ、間もなく静かになったので、そうしなかった。砂島が大きくなりました。　※『県火山志』
184	**安永９年10月４日～　１７８０年10月31日～　大浪・桜島沖　桜島上山一氏藏年代記** 同十月四日夜四つ前【10時頃】でしたか、噴火し、遠く炎が上がり、火山雷があり、大きな音が聞こえ、海が大いに鳴り、大浪が上がり、間もなく静かになった。　※『県火山志』
-1	**津波・桜島沖　桜島燃見聞書** 右の【十月】四日夜、海中から噴火し、福山・宮浦（神社）一ノ宮の鳥居の下まで大波が上がり、敷根町まで上がりましたとのこと、その外の所も波が及びましたけれども、委細は知りません。 子十月十三日　晴天　七ツ時【午前？４時頃】に海中から噴火しました。福山町敷根、国分辺りへも、波が上がりましたとのこと。大廻の方から牛根の方は、少し上がりましたとのこと。　※『安永桜島噴火史料』
185	**～安永９年11月３日　～１７８０年11月28日　大波・桜島沖　重豪公御譜** 先に御届け申し上げておきました私の領地の桜島の噴火について、近辺の海中に出できた島々は次第に大きくなりましたが、海底から火勢が強く噴火したときは、大波で近くの町や田や人家等に被害を与え、城下にまで高汐が揚がり、海辺の侍屋鋪並びに町家を破損した所が多く、今の通りでは今後どれくらいの損害に及ぶか計り難いこと　※安永９年11月３日付け届出～『旧記雑録』
186	**安永10年３月18日　１７８１年４月11日　津浪・桜島沖　桜島池田氏蔵年代記** 安永十年辛丑三月十八日昼七つ頃【４時頃】、本高免村の前にできた島が噴火し、津波が大いに上がり、浦の前に白浜村から薪採りに来合わせた者の舟を打破り、浜近くに居た男五人、女一人が波に引かれて死んだ。ここで漁をしていた谷山和田浜からの丸木舟、三人乗と四人乗の二艘が転覆沈没した。三人は死骸が上り、四人は行方不明。小池村の浜に、高さ七、八間【12.7～14.5メートル。『日本噴火志』が「間」に疑問符を付け仮定した「尺」なら、２～2.5メートル】程の浪が上がることが十度であった。また、海中から泥、大石が上がること数知れず、白浜村の上から黒神、瀬戸村まで潮が揚がり、泥交りの雨となって降ること激しく、泥の積ること一尺程であり、松浦村から本高免村の大燃崎の辺りに庭松を採りに行った者が噴火に遇って、三人の内一人が行方不明となり、二人は何とか（命は）助かったが半死半生となった。　※『県火山志』
-1	**安永10年３月18日～　１７８１年４月11日～　桜島沖　重豪公御譜** 一昨年以来御届け申し上げておきました私の領地の大隅国大隅郡桜島の噴火の件、徐々に鎮まる方にありますが、先に海底噴火でできた島の近辺で、この三月十八日前兆なく噴火し始め、最初の噴火の跡や近辺の海中からも全体的に最初の爆発と同じく烈しく噴火し、地震が起き、砂・石・灰が降り地を埋め、死傷者は別紙の通りで御座いまして、其の後少々勢も治まりましたところ、右同所が又々鳴動し始め、… 一死者　八人 一行方不明者　七人 一怪我人　一人 一船大小　六艘

	… ※天明元年４月26日【１７８１年５月19日】付け届出～『旧記雑録』
-2	**桜島(沖)　横山源太夫氏所藏 燃之記** 丑【安永10年】三月十八日【１７８１年４月11日】八ツ半時分【午後３時頃】、俄に噴火し、（桜？新？）島の高い所の下から噴火し、高い岡が燃え崩れして、谷山の丸木（舟）二艘が、空中に吹き上げ、高免村の波打ち際から二百間【360m強】位ありますところに、（木っ端）微塵になり、落ちていたとのこと。八人の漁師達は、瓦の鬼（のような色）になって、汀へ死体があったとのこと。白浜村の人達は、多くの人達が、高免村の内へ、噴火について枯薪取りに参っており、右の人達の内の七人に厚く（熱い）泥が降り、焼け死にいたしましたとのこと。浜辺へ来ていましたから厚く（熱い）泥が降り（焼け死にましたが)、少し上手の方へ来ていました人達は、泥が薄いために、少々は皮が剥げましたけれども、助かりました。　※『安永桜島噴火史料』
-3	**桜島(沖)　藤崎万十廣次 燃之記** 三月十八日【他の史料から安永10年丑で１７８１年４月11日であろう】、谷山から魚取りにやって来て居ました者達五人が燃え死に、白濱村・松浦村から薪取りにやって来ていました者達は、その流れ前と云う所で三人燃え殺されました。　※『安永桜島噴火史料』
187	**～天明元年４月８日　～１７８１年５月１日　桜島沖　重豪公御譜** 今月八日噴火し始めましたけれども、直ぐに火勢が衰えまして、しかしながら先々どのようになるのか予測し計く、　／　私の領地の桜島は、この三月十八日、四月八日の噴火によって、田畑の損害等　※『旧記雑録』
188	**天明元年７月２日　１７８１年８月21日　大風・三州　続日本王代一覧** 薩摩・大隅・日向で大風
189	**天明元年７月27日　１７８１年９月15日 大風洪水・種子島 種子島家家譜** 大風・洪水で、高千八百九十四石五斗余が当損、十七石余が永損で、頽家五百四十四（倒家八十六、損家四百五十八)、死馬十五頭、死牛十五頭、流失船三（二枚帆)。
190	**天明元年８月　１７８１年９月　大風・奄美大島　大島代官記** 稀なる大風があり、島中で家数凡そ二百軒余を吹き崩した。
191	**天明元年10月４日　１７８１年11月19日　桜島　桜島上山年代記等諸書** 燃島で噴火した。また、向島で噴火した　※『桜島大正噴火誌』
192	**天明元年12月５日　１７８２年１月18日　桜島沖　日本噴火志** 「昼七つ時（午後四時頃)、高免村の沖で海底噴火があり小池から夥しく見える」云々
193	**天明２年　１７８２年　風水害・封内一統　鹿児島県史年表** この秋は風水害で藩内一円が凶作となった
194	**天明２年７月15～16日　１７８２年８月23～24日　大風雨・種子島　種子島家家譜** 夜から（翌）十六日に至るまで大風雨で、田一町八畦二十三歩【10,800㎡弱】永損、二十六町五反五畦【26万㎡【ヘクタール】余り】当損、倒壊家屋七十（五)・厩五百三十七、死牛二頭・死馬二十五疋。
-1	**甑島　甑島郷士富ヶ尾移住記** 大風雨が片時も止まず、風は大木を折り、水は野山まで沖中の如くに諸所の堤を破損し、或いは田畑を埋め、或いは洗い剥ぎ去る程の大風・洪水で、我も我もと撰び立った粟、陸稲を吹き剥ぎ、唐芋は葛も葉は落とされ、水流【川の屈曲部沿い地】畑は川底になり、洗い剥ぎもあり、口で言えず筆で書き及ばない痛みだった。水稲も大方は穂が出る前だったが、二、三日も、

	場所によっては四、五日も、水に浸り、少々は穂が出たけれども、茅の如くに枯れ捨てられた。誠に秋の寂しさは何に喩える方法もない。【前後数年の凶作飢饉により、天明４年３月、下甑手打麓50弱家族２百人余が肝付郡串良町有里字富ヶ尾に移住するに至った。】　※『下甑島村郷土誌』
195	**天明２年　１７８２年　桜島　重豪公御譜** 今まで噴火が休まらない、　／　今もってあちこちに少々づつ煙が出て噴火は未だ止まない、　※天明２年10月21日（１７８２年11月25日）付け届出～『旧記雑録』
196	**天明３年８月７日　１７８３年９月３日　桜島　地学協会報告** 大隅の桜島嶽が大噴火し、灰砂を降らし、遠く京都に及ぶ　※『日本災異志』
197	**天明４年６月25日・７月30日　１７８４年８月10日・９月14日　大風洪水　重豪公御譜** 私の領地の薩摩・大隅・日向国の内、今年六月二十五日、同七月三十日の大風・洪水による損失の記録 … 一潰れた家が四百十四軒 … 一死人が一人 …
198	**天明５年10月19日　１７８５年11月20日　桜島　日本噴火志** 「夜九ツ（午前零時頃）過、後平の以前の噴火口跡辺りから噴火したが、間も無く静まった。瀬戸村には灰が降って、…黒神村は軽石が少し降ったが作物に害はなく怪我人も無かった」　※『大日本地震史料』は「桜島上山一年代記」として「十九日、向山が噴火した、」
199	**天明６年　１７８６年　水害風害　鹿児島県史年表** この年、水害・風害・蟲害が相次ぎ、田畑の被害が多く、また、死傷者を出す
200	**天明６年６月、８月28日　１７８６年６月26日～７月16日、９月20日　洪水、大風・三州　重豪公御譜** 私の領地の薩摩・大隅・日向国の内、今年六月一日から同二十一日までの洪水、同八月二十八日の大風による損失の記録 … 一潰れた家が一万五千八十七軒 一流れた家が三十軒 一神社仏閣の被害が二十一棟 … 一橋が五百十六ケ所 一船が大小で二百三十七艘 一死人が百九十八人 　内男が百七十四人 　　女が　二十四人 一死んだ牛が二匹 一死んだ馬が三十四頭
201	**天明６年８月28日　１７８６年９月20日　大風・種子島　種子島家家譜** 夜、大風が、樹木を抜き、稲を傷めた。
-1	**薩南諸島を除く藩内　嘉多美農水** 一怪我人三人

	一死者五十六人 一行方不明者九十九人 一琉球人死者四人 一右同行方不明者五人 　合わせて（死亡・行方不明）人体百六十四人 一（米石）高四万二千八百四十八石余【約６千５百トンで反収５百kgとすると千三百町歩程度全滅】 一死んだ牛馬十二匹 一破船百七十三艘 一行方不明船十艘 一倒家四千八百四十二軒 　但し、地方の外に甑島を含み、七島【今の十島村トカラ列島】その外の島々は不知【含まない】、
202	**寛政２年６月18日～　１７９０年７月29日～　桜島　桜島上山一氏蔵年代記** 夜九つ時【午前０時頃】、（桜島の）御嶽が大いに鳴った。十九日八つ時分【午後２時頃】御嶽が大いに鳴ったが煙は見えなかった。雨は降らず、霞が掛かって頂上の様子が分からず、十九日から二十三日まで灰が降ること昼も夜も止まらず、煙が立つこと限り無く、島中の西瓜や煙草は残らず大打撃であった。　※『県火山志』・『日本噴火志』
203	**寛政３年８月14日　１７９１年９月11日　桜島　桜島上山一氏蔵年代記** 昼七つ時【４時頃】、御嶽が噴火し、煙が立って強く（音が）鳴った。西風が吹いて前平に灰が降り、後平や黒神辺りは、日中も完全に夜のようだった。しかしながら、別に被害はなかった。最初の噴火の時の通り、黒煙が巻上って激しく見えたが、避難する程では無かった。　※『県火山志』・『日本噴火志』
204	**寛政４年８月26日　１７９２年10月11日　桜島　桜島大正噴火誌** 向島が噴火し、及んで桜島嶽が噴火した　※『大日本地震史料』は「旧記」として「二十六日、向山が噴火した、」。『県火山志』によると玉龍山続年代記と桜島上山一蔵年代記から
205	**寛政５年８月14日　１７９３年９月18日　大風・奄美大島沖　大島代官記** （代官の乗った船等が龍郷湾入り口の）阿丹崎から御出帆したところ、大風が吹き出し、行方が知れず、
206	**寛政６年　１７９４年　桜島　玉龍山続年代記** 何年も、桜島の噴火が止まず、四五月の頃、風によって数十里の範囲に、大いに灰が降った。　※『県火山志』・『日本噴火志』
207	**寛政９年　１７９７年　桜島　桜島上山一氏蔵年代記** 夏、…桜島は灰が降って、唐芋が全体に実りがよくなく、粟も実らず、桜島だけは飢饉であったが、外の地域は諸作物が十分な年であった。　※『県火山志』・『日本噴火志』
208	**寛政11年２月22日　１７９９年３月27日　桜島　桜島上山一氏蔵年代記** 二月二十二日から、嶽から少々煙が立って灰が降り、後平には多く灰が降って麦は傷んだ。二十六七日頃から、激しく響く音が強く、夜昼止まず、三月七日に至って止んだ。　※『県火山志』・『日本噴火志』
209	**寛政12年11月９日　１８００年12月24日　大風？・徳之島　徳之島面縄院家蔵前録帳** 楷船【薩摩藩との往来の船】一艘が、（徳之島町中心部亀徳の北隣）井之川の湊口で破船に及び、乗組員達五十人の内五人が溺死し、【中略】（天

	城町北西部）与名村【与名間】下崎原でも馬艦船【主に物資運搬に使われた帆船】一艘が破船に及び、乗組員達四十人の内二十人が溺死し、【後略】
210	**文化元年３月20/21日　１８０４年４月29/30日　大雨・種子島　種子島家家譜** 大雨、油久村の田地五十余町【50万㎡程度】を損じた。
211	**文化元年５月１９日　１８０４年６月２６日　大雨・種子島　種子島家家譜** 中之村・島間村・安城村・安納村・古田村で、大雨が降って、田や畝を損じた。
212	**文化３年７月18日　１８０６年８月31日　大風・種子島　種子島家家譜** 中之郡で大風で、倒家九十二区。
213	**文化７年正月18日　１８１０年２月21日　降灰？黄砂？・川辺　次渡日帳か** 夜明け前から噴火して山が噴出しましたためか降灰があって世界が黄色となる。　※『川邊村郷土誌』
214	**文化７年７月26日　１８１０年８月25日　大風高波・徳之島　徳之島面縄院家蔵前録帳** 申刻【午後４時頃】から翌二十七日巳刻【午前９時過ぎ頃】まで大風・高波で（徳之島町の）亀津村の海辺の家家四十軒余が流失に及びました。右の大風で、沖永良部では破損した舟二艘を卸して替え、亀津・（伊仙町の）面縄の両湊で破船いたしました。
215	**文化８年４月４日　１８１１年５月25日　洪水・種子島　種子島家家譜** 洪水で、中之村の田地を壊すこと、甚だ多。
216	**文化９年７月11日　１８１２年８月17日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、平山村・安納村・現和村・国上村・島間村・古田村・増田村・住吉村・上里村・安城村・西之村・油久村・坂井村で、禾【稲・粟？】を傷め、且つ、蝗（の害）があった。
217	**文化10年　１８１３年　諏訪之瀬島　三国名勝図会** 燃峯　常に火があって噴火する。文化十年、大いに噴火し、人民が居住しておられずに、他島に移ったという、 ※『薩隅日地理纂考』もほぼ同文で「今も人家はない」と添える
-1	**諏訪之瀬島　大森房吉出張復命書** 爆発的に噴火して居住していた民達が悉く他の諸島に逃れ避難した。その後噴煙が絶えず、因って明治十六年頃迄は無人島となった。此の噴火のとき、鎔岩を島の南西にある迫尻（サコジリ）及び水河（スイゴ）方面に流出して、海中に突出た。当時、新たに生じた噴火口の直径は「三百メートル」に達した。　※『日本噴火志』
218	**文化10年５月７日　１８１３年６月５日　津波？・坊泊？　坊津拾遺誌** 夜、津浪があった。坊下浜泊の人家や魚小屋が流失した。　※「津浪」と記されているが昭和26年10月14日に薩摩半島を中心に大きな被害をもたらしたルース台風の高潮についても野間池・岬においては「津波・津浪」と報道された例があるのと同じく地震等に因るものでなく141の市来・串木野や176の沖永良部のように（但しこれらと異なり台風には早い時期だが）気象現象であることが疑われる。出典は不明
219	**文化11年５月　１８１４年７月 大風波・徳之島　徳之島面縄院家蔵前録帳** 大風波によって島中の人家やその他の被害は左の通り、【異本では「六月十五日…急に津波が何度も打ち掛かり、古来、無類の大風波で、死人や流失したり損なわれた物は左の通り、」】 一　死人八人、（内三人は島人の内で一人は女。五人は神遊丸の船乗りで、

	本船へ乗り付けて居て、破船に及びました際に死んでしまいました、） 一　死牛【馬か】三疋 一　流失した家数百七十九軒 一　吹倒された家数七百八十六軒 一　同（住家以外）九十四軒 御蔵・高蔵・津口番所並びに弁才天堂・御高札凶リ【？】、 一　流失した操舟【一本の巨木を刳り抜いた丸木舟】・板附舟【船首・船尾が同形で平たい奄美伝統の小型の木造船】二十六艘 一　破損した操舟・板附舟七艘
220	**文化11年７月10日　１８１４年８月24日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、倒家四十一、斃馬一匹、傷んだ禾多。
221	**文化12年７月４日　１８１５年８月８日 大風洪水・種子島 種子島家家譜** 大風・洪水で、田園が大いに損じた。
222	**文化14年４月27日　１８１７年６月11日　洪水・種子島　種子島家家譜** 洪水が、下西之表・安城村・現和村・安納村・納官村で、田地を破ること、甚だ多。
223	**文化15年４月・６月　１８１８年５月・７月　大風・徳之島　徳之島面縄院家蔵前録帳** 寅四月二十二日【１８１８年５月26日】夜半から同二十五日迄大風、面縄に居た船の長久丸が砂糖を積入れ半ば破船、湾屋に居た船の白山丸並びに行安丸が、同六月四日【７月６日】から六日迄の大風で破船、
224	**文政４年７月30日　１８２１年８月27日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、大いに禾を傷めた。
225	**文政４年12月20日　１８２２年１月12日　霧島山　国分表締方横目の霧島噴火記** 今月二十日朝､霧島山の北に有ります中嶽の頂上から噴火しました様子で、白煙が少々立ちましたところ、晩方になって、黒煙が夥しく炎上し、近辺の地迄も震動いたしました。只今に至りましては漸く静まりましたけれども、煙は止みませんで、…、 一昨日、曽於郡の行司山担当の役人達を、わざわざ嶽山へ登らせ、右の噴火口を見届けさせましたところ、中嶽の北半分の七・八分目に新たに噴火しました口が四ヶ所くらい有り、只今は噴火が盛んで煙が夥しい最中でありますから、詳しくは判りませんけれども、その間は何れも一町程【百メートル位】づつも隔っております様子が見て取れ、…、右の嶽は享保元申年【１７１６年】に噴火しましてから今年迄百六年になり、その時の噴火口跡は先年から池になっているらしいところ、この度、噴火しました場所は右の側に当たっていますから、その辺へ自然と水気があり、前の通り硫黄の気の泥が涌出しましたと思われます。… ※大日本地震史料は今村明恒著の「九州地震帯」からの引用で、日本噴火志は「今村理学博士の調査による」とする。原文全体の入力や現代語訳の暫定版は完了したが長いため略す
226	**文政６年　１８２３年　洪水・大島　大島代官記** 西間切と東間切が洪水で岩が崩れまして、田畑が沢山破損しました ※　**連官史**では文政五午年【１８２２年】に同様の記述。また**南嶋雑集**
227	**文政７年12月３日　１８２５年１月21日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風・洪水で、茎永村の崖が崩れ、三名が圧死した。
228	**文政10年11月３日　１８２７年12月20日　旋風・種子島　種子島家家譜** 坂井村の柁潟・塩戸で、旋風が大いに起こって、塩屋を壊し、火を煽って、

	人家が尽く焼失した。漁船を空中に（巻き）揚げ、或いは水の中に落とし、或いは石の上に落とし、或いは破り、或いは損じる。皆が、潜り龍が起きたと云った。人馬や手札【？】等は無事だった。
229	**文政11年８月９日　１８２８年９月17日　旋風・種子島　種子島家家譜** 夜亥刻【10時頃】、ツムジ風が一條（幅三十丈【約90ｍ】位）起こり、現和村大峰から、東北に向け吹き去り、本立の人家を壊し、菖蒲平に出て北に向かい、国上村の寺之門を過ぎて奥に到り、転折して大原を過ぎて海に出た。その触れた所は、巌が崩れ峰が割れ、樹木は大小となく折れ摧け、巨松を揚げて数町外に牽引した。況んや人家に於いてをやで、国上村の倒家十三、破損するものは数知れず。中でも、河内勘左衛門の家が倒れ、勘左衛門及び外孫の河内嘉平太の娘が、建材が圧する所となって即死し、嘉平太の妻は、隣人の救いを得て僅かに死を免れた（後、二八日を経て竟に死んだ）。そして火が起こり、瞬く間に焼け尽くし、二人の遺骸も灰となった。また、百姓新次郎の家が倒れ、その妻が圧死した。
-1	**長島　長島町郷土史** 本文：大暴風雨，年表：大暴風
230	**文政12年５月13日　１８２９年６月14日　洪水・種子島　種子島家家譜** 中之村の田地は、洪水のために破壊した。
231	**文政13年４月26日　１８３０年６月16日 大風洪水・肝属 守屋舎人日帳** 大風・洪水で、諸所で少々づつの破損がありました。されども諸作職【土地に対する農民の権利→農地？】の傷みは少ないとの話でありまして、もっとも水の勢いは六尺【1.8メートル】位増しましたから、屋治土手【旧高山町役場から南へ直ぐの高山川に架かる「屋治橋」辺りの土手か】を越える程でありましたこと（だった）
-1	**文政13年４月27日　１８３０年６月17日 大風大雨・種子島 種子島家家譜** 大風・大雨が、大いに田地を壊した。
232	**文政13年５月２日　１８３０年６月22日　洪水・種子島　種子島家家譜** 増田村・納官村・野間村・油久村が、各、洪水が大いに田地を壊したと告げた。
233	**文政13年７月８日　１８３０年８月25日　大風洪水・肝属　守屋舎人日帳** 大風・洪水でしたけれども、諸作職【農地？】等の傷みは少なかったです。もっとも波見浦【現在の志布志国家石油備蓄基地の南西岸・肝属川河口付近】で破船があり、死人が八人とのことを承りましたこと（だった）
234	**文政13年７月11日　１８３０年８月28日　大風・奄美大島　大島代官記** （奄美市名瀬の中心部の北東に隣接する）大熊の湊を御出帆し、翌十二日大風で三艘とも朝鮮国へ漂着し、九月に肥前の内、田助【長崎県平戸の田助浦】へ着いたとのこと、寅年五月から七月迄に大風三度、小さめの大風二度、都合五度の大風で、（翌）卯年は砂糖・唐芋が凶作だった、 五月から七月【６月から９月にかけて】まで、五度の大風で、砂糖黍・薩摩芋が大いに痛み、翌卯（年）春は大凶作で【後略】
235	**文政13年７月26日　１８３０年９月12日　大風高波・徳之島　徳之島面縄院家蔵前録帳** 天保元年辛卯【元年は一つ前の庚寅で12月改元前の】七月二十六日【１８３０年９月12日】から同二十八日まで、丑・寅･卯･辰【北東～南東】の方から大風・津浪で、（徳之島の東側の）亀津村の浜辺の人家三十軒が流失又は破損致しました、
236	**文政13年９月６日　１８３０年10月22日　大雨・種子島　種子島家家譜** 大雨が、安城村・住吉村の田地を傷めた。

237	**天保２年５月５日　１８３１年６月14日　大雨土砂崩れ・種子島　種子島家家譜** 昨夜から今朝にかけて大いに雨が降り、平山村の農夫仙七の娘で、幼くして父母を喪い、親族の庄市の家で長じた者が、今朝、雨の為に山が崩れて家を壊し、梁に圧して死んだ。
238	**天保３年３月20日　１８３２年４月20日　霧島山　大日本地震史料** 霧島山が噴火した。　※「霧島の研究」からとして「天保炎上、天保三年三月二十日、」
239	**天保３年９月10日　１８３２年10月３日　大風波・徳之島　徳之島面縄院家蔵前録帳** 夜から翌十一日昼時分迄、近年には稀なる大風波があったので、島中のキビその他の諸作物が傷み、死人・死牛馬・怪我人等があり、津口番所（の被害があり）、また、繰舟が流失し、人家や砂糖小屋を数百軒吹き倒し、その外の損なわれた物が相当に及びました
-1	**天保３年９月11日　１８３２年10月４日　大風・奄美大島　大島代官記** 稀なる非常の大風で諸作物が大いに傷んだ
-2	**大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、島中の田園を傷めたこと、数え上げることもできず、城内及び船手等、多く破損し、その外、家を倒すこと、九十軒余。　※翌日は，都城の『年代實録』に北東～北からの「大風」が記録されている
240	**天保４年５月９日　１８３３年６月26日　洪水・鹿児島　鎌田正純日記** 水に浸かった家が二ヶ所流れました。（甲突川に架かる）新上橋・西田橋・武之橋も流れました。　※『鹿児島県史料』（以下注記略）
-1	**洪水・都城　年代実録** 大雨で洪水。各所が破損し、安永渡りの土手の高さ二間【約3.6m】の三合（目辺りで？）根廻り十二間【22m弱】、長さ八十間【約145m】破損した。
241	**天保４年５月14日　１８３３年７月１日　大雨・種子島　種子島家家譜** 大雨で、油久村・増田村・安城村・島間村の田地が、大いに壊れた。
242	**天保４年５月28日　１８３３年７月15日　洪水・鹿児島　鎌田正純日記** 今日、四ツ【午前10時頃】後から大鐘時分【午後５時頃】まで、大水が出た。九日の水より一寸位少なかったです。（下流左岸の）千石馬場の方は、八寸【25㎝弱】位多く出ましたとのこと。翌朝までかかって水が引いた。下人の仁十が、夕方から（姿が）見えませんでしたところ、翌朝、日置氏（の屋敷の）角に流れていました。
-1	**洪水・都城　年代実録** 五月二十八日【７月15日】、同二十九日、各所が大雨で洪水が続き破損した。横市村の勘貫取水井堰の上流・財部境から加治屋下まで、本川が流れ通った。その外の各所も大破
243	**天保４年８月20日　１８３３年10月３日　大雨・種子島　種子島家家譜** 大雨、洪水で、西之表村・現和村・安城村・野間村・茎永村・平山村・坂井村・増田村・納官村・島間村で、田園を傷めたこと、数え上げることもできず、その損（の大きさ）に随い、賦を減ずることに差あり。
244	**天保５年３月10日　１８３４年４月18日　洪水・種子島　種子島家家譜** 夜、洪水で、現和村・住吉村が、田地を傷めた。
245	**天保５年５月21日　１８３４年６月27日　大雨・種子島　種子島家家譜** 大いに雨降る。吉田村・安城村の田地を傷めた。

246	**天保６年５月14日　１８３５年６月９日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、本源寺の境内の墓所の松が倒れ、古田村・国上村・安城村では、多く木【？禾】を損じた。国上村の湊の塩戸の善次郎という者が、秣〔まぐさ〕を刈った帰路、松が倒れ、圧する所で死んだ。
247	**天保６年閏７月21日　１８３５年９月13日　大風・鹿児島　鎌田正純日記** 昨夜四ツ【10時頃】時分から雨風で、今朝に至って前代未聞の程の大風で、城山の松並びに街中の人家が吹き倒されました数が（多くて）幾つとも知りません。九ツ【正午】頃から少しは吹き止みました。少々は、終日吹通しでした。珍しいことだから記した。 今日の風が、御先祖（を祀る）お堂を吹き壊しました。その外、少々づつは、所々壊れました。植木も、多く吹き倒しました。
-1	**大風・都城　年代実録** 二十日【９月12日】夜から翌二十一日八ツ時分【２時頃】まで、大風。閏七月二十日は二百二十日だった。近年珍しい大風。
-2	**洪水・川辺　次渡日帳か** 夜明け前の大風…浸水家屋が多く舟で救助を出したとのことである　※『川邊村郷土誌』
248	**天保７年７月７日　１８３６年８月18日　大風雨・種子島　種子島家家譜** 西風が大いに吹き、雨もまた、激しくて、島中の五穀が、大いに損じた。
-1	**強風雨洪水・肝属　守屋十郎太略日記** 風雨が強く、麓小路へ水が上りました。そうでしたけれども屋地戸越えの件は水が越えましたようにはなかったでした。拙宅の木戸（近くの）橋の際まで水が上り（ましたが）、石橋は未だ越しませんでした。紺屋馬場辺りは格別に水が降ったとのことを承りました。
249	**天保９年閏４月17日　１８３８年６月９日 洪水・串木野 横目御用向覚留** 大雨につき、早期から担当者が巡回し、精一杯防水・排水に努めましたけれども、大量の洪水で、当地域中のあちこちが破損に及びました。街道筋の破損
-1	**洪水・鹿児島　鎌田正純日記** 今朝四ツ【10時頃】時分から九ツ八ツ【正午頃・２時頃】時分までの間、大水が出た。書院の床下など（まで）一寸位も空きましたろう。（建物の）内へ上がらんばかりでした。御隠居（宅）へは、内へ少々上りました。前代未聞の珍しい洪水だったから（書き）留め置くものだ。右の洪水は八ツ【２時頃】前後から少々引いて、（夕）暮時分には大方引きましたけれども、未だ田の辺りは、すべては引き取りません。
250	**天保11年３月22日　１８４０年４月24日　竜巻・霧島　年代万古案記** 大雨降り出し、□図のように氷交り、何風とも分からず、殊の外強くありましたけれども、暫くの間で、四ツ時分【10時頃】になりましたところ、天気になり、九ツ時分【12時頃】になり晴天になり、そうしたところ（霧島・牧園の）踊（郷）下の中津川・塩浸への竜巻で、人家数軒が吹き倒れ、怪我人等が有り、その外諸所、霧島まで横一町【百ｍ強】位（の幅で）、道路・集落内は勿論、（霧島神宮の旧参道出入口辺りにあった）花林寺の本門・鐘堂が吹き倒され、その外破損し、怪我人は僧一人、囲炉裏の内に押付けられ難渋とのこと、いろいろ評判が有りました。しかしながら御宮【霧島神宮】へは木の葉も落ちませんでした等の評判を承ったこと。珍しいこと（であり）記し置く。 重富の人といって百姓風の者、家が倒れ掛かり焼死致しました者が有った。【略】右の焼死いたしました者、城瀬【現在の鹿児島県警察学校の西側で

	思川と県道五七号線が交差する辺り】の善次郎と申す者で、誠に不憫なことの経緯を承り、あらまし記し置く。右の逆風【吹き返し？】でもありましたか、御当地の矢来御門が吹き倒れましたとのこと。 四月四日霧島御参詣につき、御供を仰せ付けられました。逆風の跡を見物致しましたところ、話に聞きましたよりも大きな損害で、観音堂脇の大木が根元から一気に倒れ、前代未聞（のこと）でしたから記し置くもの。
251	**天保11年７月17日　１８４０年８月14日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、国上村・増田村・坂井村・茎永村・西之表村で、田地を損じた。
252	**天保11年８月２日　１８４０年８月28日　洪水・肝属　守屋舎人日帳** 洪水で屋治土手【旧高山町役場から南へ直ぐの高山川に架かる「屋治橋」辺りの土手か】は三尺【１メートル弱】（だけ？）残りましたとのこと 床の下を水が（流れ）通りましたとのことを承りましたこと（だった）
-1	**洪水・鹿児島　鎌田正純日記** 今日は、洪水で通路が不自由故に、別勤の方を頼んで遣って、出勤は致さなかった。
-2	**洪水・都城　年代実録** 同二日朝、未曾有の洪水で、竹ノ下大橋の東の方で二間位水が上がった。西ノ方橋口で溢水【？破堤？】するに至って危険になったとのこと。十三年前の（文政十一戊）子年【１８２８年】の洪水より水が多かったですとのこと。西口番所の下から押切の前の田地、松元の下・片平の下まで一面に湖のようになり、新町へは船で通行し、新馬場は、すべて水が上がった。 同三日【８月29日】の夜、又々大風で、七ツ時分【午前？４時頃】は辰巳【南東】から吹き、同四日の夜中は、珍しく大いに西風は吹かない（のに？）、又々洪水。二日の朝程ではなく、今回は毎回の（ような）大風は強くなかったですけれども、時節柄、稲の出穂の前で、（水が）上がった田は多く、損高八千石余、永損・当損・上見について、御蔵の現物の米九百三石、御私領の現物の米三百石余、給地現米二百石余。
253	**天保11年９月８日　１８４０年10月３日　洪水・肝属　守屋舎人日帳** 無類の洪水で、屋治土手は半分切れました。もっとも山塩【汐＝土石流】と申すもの（でしょう）、波見牟礼山の九合目から下まで崩れ、その外、波見中へも数ヶ所崩れ、浦七人、在に八人の死人がありましたこと（だった）
254	**天保12年４月３日　１８４１年５月23日　口永良部島　大日本地震史料** 口永良部島が噴火し、八月に至って大爆発をなして、西麓の村落に多大の被害を生じた、　※田中館秀三著［Volcanic Activity in Japan］一節
255	**天保12年５月10日　１８４１年６月28日　洪水・鹿児島　鎌田正純日記** 今日は大雷鳴で、七ツ【４時頃】時分に六尺余【２ｍ近く】の洪水が出た。
-1	**天保12年５月11日　１８４１年６月29日　洪水・種子島　種子島家家譜** 洪水が、下之郡で、田地を破った。
256	**天保12年５月18日　１８４１年７月６日　洪水・鹿児島　鎌田正純日記** 六尺位【２ｍ近く】の洪水が出た。
-1	**大風・重富　年代万古案記** 大風で、近年（では）珍しく御屋敷の破損箇所が多く、田舎作職【百姓職等と同じく耕作を請負った農民の土地用益権（のある土地）か。屋敷についてであれば田舎の不十分な作事【施設管理】（に係る構造物等）か】については、多くは大きく痛み、すべて通風口は（強風が）吹き切り（破損し）、時ならぬ【思いがけない・予測不能の・気まぐれな】風で、その外は痛みは無く、国分などは毛頭（被害）無しと承ったこと（だった）。

-2	**洪水・都城　年代実録** 七ツ時分【午後？４時頃】から北東風の大風と雨で、翌十八日の朝、静かになった。去る子の年の川より三尺位低い程の洪水で、諸所で川筋が大破。
257	**天保12年６月15日　１８４１年８月１日　口永良部島　金峰神社御縁起考** 天保十二年丑六月十五日、嶽山が俄に鳴動し、噴火の炎や煙が天を焦がし、城東の村落が悉く焼失し、死者が多かったことにより、直ちに移住した. これより先（年暦不明）冬十一月十二日、噴火の砂や石を降らし、（年暦不明）二月二日、同じく噴火し、また、（年暦不明）六月二日、噴火の焦煙が天を焼いて全村が焼失し、このような数回の噴火があってからは、今に至るまで大した噴火はないところである　※『県災異誌』
258	**天保12年７月10日　１８４１年８月26日　洪水・鹿児島　鎌田正純日記** 今朝は大洪水で、小座の雨打〔ゆた〕まで水先が参り、
-1	**常不止集** 昨日の大水については、「たんたど」の辺りを洗い崩しましたので、見物として、さよみ坂迄行き掛かりましたらば、今朝も大水で行かれず、引返し葛原橋の方に参りましたらば、仁王堂馬場は大水で、それでも踏み通りましたらば、股下に掛かった。そうしまして、坊中馬場を踏み通り、大乗院橋へ参りましたらば、猪飼家の角の物見の下の石垣が、僅かに二尺位空く、それから諏訪の鳥居へ出て、上馬場筋を直ぐに帰った。四ツ時【10時頃】出勤、八ツ【２時頃】後に退城。戸柱の墓から拙家の墓へ参った。華舜軒へ参り、馬繋ぎ馬場の方へ行きかけましたらば、未だ大水で通られ難く、また黒門へ廻りまして、帰った。 先日の水は新上橋・武之橋の橋脚を洗い流し、当分の間も舟渡しとのこと。
-2	**年代実録** 鹿児島・加治木が大水。（鹿児島城下の）西田町は、軒（下）一尺位の所まで水が上がりましたとのこと。その外、日置・伊集院・永吉・吉利・谷山・市来の各地方で大水だったとのこと。
259	**天保13年５月17日　１８４２年６月25日　洪水・鹿児島　鎌田正純日記** 今日は大洪水で、九ツ【12時】時分から水が書院の縁側に満ち、上り立ち、一番高い石の上を一分位水が越えました程の洪水で、暮れ時分迄も半ば水が引きませんでした。
-1	**常不止集** 九ツ【正午】過ぎ、大洪水とのことで、さよミ坂から黒葛原橋・戸柱橋・抱新橋へ見物に参り、… 今日は大洪水で、西田橋の丁門番所を洗い流しましたことだ。外にもそれぞれ、怪我人や破損しました場所も大分有るとのことだ。未だ詳細は承らない。下は、千石馬場の梅田家の角迄参り、諏訪家の前迄は舟が通いますとのことだ。上も、清水馬場から押廻し、諏訪馬場いっぱいに水が洗って行ったことだ。
-2	**洪水・重富　年代万古案記** 水が車田を一流れ、永作東下が打ち切れ、破損した。その外も痛んだ所が多かった。諸郷々が同様で、御当地は水が上り、西田橋口の大門が倒れた。
260	**天保14年５月18日　１８４３年６月15日　洪水・種子島　種子島家家譜** 増田村で、洪水が、大いに田地を損じた。
261	**天保14年夏　１８４３年夏　洪水・伊佐大口　渕辺の有村国盛の石垣の石碑** 大水で旧来の堤・古い堰が尽く崩壊
262	**弘化２年５月19日　１８４５年６月23日　大風高波・徳之島　徳之島面縄院家蔵前録帳**

	大風浪で、御代官様・御附役様が御乗船の宝来丸が湊内で沈み、御横目様が御乗船の虎柳丸は破船した。宝来丸には積入れていた砂糖を取り揚げましたところ（軽くなり）、元の通り浮き揚がりました【中略】
-1	**弘化２年５月20日　１８４５年６月24日　洪水・都城　年代実録** 夜半から、辰巳【南東】からの大風雨が翌二十日まで。（二十日の）宵の口頃は静かになりましたが、翌二十一日から終夜、大雨で洪水。
-2	**洪水・鹿児島　鎌田正純日記** 夜前から風雨、夕方洪水四尺内外　【翌21日：暮時分から洪水五尺余】
-3	**岩瀬之玉** 烈風のため、処々に雨戸を嵌めました。その外、あばら家のため（雨）漏りが強く、畳はき雨もりすけとう【？】で大騒動いたしました。
263	**～弘化２年６月３日～　～１８４５年７月７日～　大風・徳之島　徳之島面縄院家蔵前録帳** 五月十九日並びに同六月二日【７月６日】から三日まで、同七月二十六日【８月28日】から二十七日まで、右三度の大風で、稲作は勿論、唐芋その外の作物が全て傷み、凶作のこと、
-1	**弘化２年６月３日　１８４５年７月７日　洪水・鹿児島　鎌田正純日記** 今日は、風雨があり洪水で、、頼み合いまして、出勤致しませんでした。
-2	**弘化２年６月４日　１８４５年７月８日　洪水・鹿児島　岩瀬之玉** 今夜八ツ時【１～２時頃】から甲突川は大洪水であるとのこと。大体八尺余【２m近く】という（浸）水とのこと。新上橋・西田橋・武橋は崩れましたとのこと。鹿児島には余り降りませんでしたけれども、川上に降りましたか、又は、土石流だろうとの評判でした。新上橋は、近々眼鏡橋に成ります筈で、石（を運ぶ）漕ぎ舟が数艘、新上橋辺りに有りましたのを洗い流し、橋に掛かりまして、崩れました（可能性）も有ったとのこと。
264	**弘化３年７月17日　１８４６年９月７日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、城内及び城外が破損し、島中で、倒れた家が、甚だ多。
265	**弘化４年６月24日　１８４７年８月４日　大風雨・種子島　種子島家家譜** 大風が、農作物を傷め、建物を倒した。（米穀千二百四十三石余、砂糖三万斤、損壊家屋百八軒）
-1	**大風雨・鹿児島　鎌田正純日記** 大風雨、　夕方洪水、　　終日の大風雨なので、屋敷中に沢山破損した所がありました。また、昨夜から吹き通して朝五ツ【８時頃】時分から追々強く、暮前に漸く和らぎました。
-2	**大風・川辺　次渡日帳か** 初め二十二日辰巳【南東】の強風から二十三日には猶強くなり、二十四日益々強風となって家屋や樹木の倒れたものが多く、　※『川邊村郷土誌』
-3	**大風・重富ほか　年代万古案記** 二十三日晩から風、二十四日大風、同日晩和（やわら）いだ。御屋敷を吹き揺らし全て破損し、その外諸所に破損した所が有った。重富も同様。それでも作職【田畑の耕作を請負った作人が持っていた土地用益権（のある土地）】については都合良く余り痛みが無かった。他郷【旧「外城」】では特に痛みが強い所も有り、近郷の加治木などでは凡そ三百軒余り倒れた家が有ったとのこと。
266	**嘉永元年８月９日　１８４８年９月18日　大風高波・徳之島　徳之島面縄院家蔵前録帳** 夜半時分から、巳の方【南東】から大風が吹き出し、諸作物が甚だしく傷み、人家等を三つの間切の各村で吹き倒し吹き剥ぐことが多くありました。

	そして、右の大風波で同十日の夜、（現天城町中央部の）阿布木名村の下干瀬へ、琉球の登観宝丸・二十三反帆【千石積み】・一艘、砂糖二十万斤余その外、反物並びに琉球製品物、多く積入れて居ましたとのこと、破船でしたところ、品物少々は取り揚げましたけれども、過半は流失に及びましたとのこと、
267	**嘉永３年６月12日　１８５０年７月20日　大風高波・徳之島　徳之島面縄院家蔵前録帳** 朝五ツ時分【７時頃】大波で、風寅卯の方【東】から吹き出し、七ツ時分【午後５時近く】辰巳の方【南東】へ吹き廻り大風となり、沖永良部島から大和船へ替え、御米は亀津へ積み渡していましたところ、（津口）番所の前の浜へ乗り揚げ、同月二十六日、川中迄引き下ろした、
268	**嘉永３年８月７日　１８５０年９月12日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、米倉の小払所一軒、枡取の居宅一軒・会所一軒、現和村の人家五十四軒・寺一軒、国上村五十八軒、住吉村五軒、安納村三十一軒、上西之表二十五軒、中西之表五軒、安城村三十八軒、古田村十一軒、茎永村四十九軒、下中之村四十一軒、増田村六十三軒、油久村二十五軒、野間村五十軒、府本十四軒、上中之村三十五軒、上里村四軒、島間村二十七軒、西之村三十軒、坂井村六十二軒、平山村四十五軒、納官村十四軒、皆駄目になった。合計七百三十二【×】軒。同日、鹿児島邸の内塀と外塀が、皆壊れた。
-1	**大風・枕崎沖？　種子嶋家家譜** 難破船が一艘、（種子島西岸南部の）島間の浦に漂着して来た。締方横目【２氏名略】及び吾が横目（姓名を逸した）が往ってこれを検察した。船子【船員】を召して船主と船子の死生について問うたところ曰く、船主は枕崎の鹿籠の丸田屋の主人であり、溺死者は十四人【名省略】この者達で、生き残れた者は我輩ら六人のみ【名省略】この者達。状況を官に聞かせた。
-2	**大風・肝属　守屋舎人日帳** 倒家、倒木など急には数が知れず、無類の大風でしたこと（だった）
-3	**大風・加治木ほか　新納仲左衛門日記** 朝五ツ時分【７時頃】風が吹出し、九ツ【正午少し前】八ツ【昼下がり】の間大風となり、御家周り諸所が破損、七ツ過【16時過ぎ頃】に吹き止みました、（鹿児島の）伊敷辺りに死人があったとのこと、
-4	**大風・重富　年代万古案記** 大風、北風で、西に変わって強く、田舎などは全て西風に（よる）痛みが強く、田などは生れ【（稲穂が）実り？】揃っていて、さしたることも無く見えましたけれども、実を取るには致らなかった、
269	**嘉永４年９月22日　１８５１年10月16日　洪水・徳之島　徳之島面縄院家蔵前録帳** 朝から雨が降り出しましたところ、すごい大雨で、暮六ツ【午後６時頃】から大洪水になり、三間切の村々の田畠等に流れ込み且つ崩し損じ、まさにこの洪水で亀津の親子四人が、居た小屋ともに流失に及びました、
270	**嘉永４年９月27日　１８５１年10月21日　大風・徳之島　徳之島面縄院家蔵前録帳** 夜に入り五ツ時分【８時頃】、南から大風が急に吹き出し、半時【１時間】もしない内に大雨で西へ吹き廻り返し、風は特に強く、これも一時の大風でしたけれども、島中の家を吹き剝ぐこと過半だった。湾屋湊へ、沖永良部島に下る詰役様の御借（上げ）船とのこと、米・大豆その外の品物を積入れ汐繋【良い潮待ちのため係留中？】のところ、南干瀬へ乗り揚げ破船

	に及び、乗組みの七人は上陸しました、
271	**嘉永４年10月１日　１８５１年10月25日　洪水・徳之島　徳之島面縄院家蔵前録帳** 大洪水で、去る【２つ上268・９日前の】二十二日同様の洪水でした、
272	**嘉永５年９月７日　１８５２年10月19日　大風高波・徳之島　徳之島面縄家蔵前録帳** 九月七日から翌八日まで大波が立って、諸田辺りから手々辺りまで磯辺の諸作物は勿論、人家も過半が傷みました、
273	**嘉永５年９月11日　１８５２年10月23日　洪水・種子島　種子島家家譜** 夜、洪水で、稲の刈り取って未だ収穫していなかったものが、多く流失した。それで、秋に、（損害に応じて）税の額を定めた。
274	**嘉永７年11月　１８５４年12月　地震・西日本　徳之島面縄院家蔵前録帳** 四日【１８５４年12月23日】・五日から日本国全体が大地震で、場所により七日内外十日余りも時々振動が起き、鹿児島では五日朝、特に震え、それから四・五日は時々震動し、併せて家作等が震え崩れましただけではなく、加治木から国分その外、都城辺り、藩外等は、家作等が揺り崩れました場所が多々ありました
-1	**嘉永７年11月５日　１８５４年12月24日　地震・肝属　守屋舎人日帳** 七ツ半【16時過ぎ頃】大地震で、段々（次々に）倒れた家などが有りましたこと（だった）
-2	**地震・加治木　新納仲左衛門日記** 八ツ【午後１時半頃】後から…乗馬は済み、…折から急に大地が揺れ出し、これは不思議と言う内、直ぐに、その座の側から地が響き裂けましたので、各々四方八方へ散乱いたしました。海辺は（液状化で）潮泥が吹き上げ、誠に近代未曽有の珍事でした。直ぐに皆々は帰りました。家内にも何も問題は無かった。馬を繋ぎ置き、新六殿同道で御屋敷へ御機嫌窺い申し上げましたところ、（前加治木領主・島津久徳の夫人）文清院様・御子様方に（おかれて）も納殿の庭へ出ていらっしゃったので、直接に御機嫌窺い申し上げ、先ずは御無難を奉祝しました。奥御殿の壁が落ち去りましたので、直ぐに拝見いたしますよう承知いたして、出頭しましたところ、誠に驚き入る次第で、壁も破損していない所はないように見えました。御近習役の邦永仲之進殿も出頭しましたので、御小納戸（役【領主に近侍し身の回りの雑務担当】）の内から直ぐに鹿児島城下へ、旦那様の御方へあれこれ（身の回りの御様子をお知らせ）申し上げますようお言葉を聞きましたところ、法元仲蔵がお越しなされたことを承りました、 今晩二度の地震いたし、昼の地震から八、九度に及びました、その度ごとに灯など点けて明るくし、蝋燭の用意などいたし、直ぐに庭へ飛び出、格護【「…飛び出す覚悟」か】などいたしておりましたけれども、昼程大きなのは無かったです、 （暦欄記事）「日の入前から大地震、夜にかけて十度くらいも揺れましたけれども、初めの地震程は（強く）なかったです、」
275	**安政２年５月15日　１８５５年６月28日　洪水・鹿児島　鎌田正純日記** 今日四ツ【10時頃】（から）八ツ（まで）出勤した。洪水なので、「川外御暇」で九ツ半【１時】頃（早く）退出し、新上橋【弘化２年１８４５年に４連アーチ石橋架設済み】の通（行）ができず、西田橋から船で帰宅いたしました。
276	**安政２年５月18日　１８５５年６月31日 大雨洪水・種子島 種子島家家譜** 大雨・洪水で、上中之村・下中之村・島間村・茎永村で、田地を損ない、

	且つ、峯が崩れて、仮屋【代官所／地頭居館】及び池亀新蔵なる者の宅を圧した。人馬は無事だった。
277	**安政２年７月13日　１８５５年８月25日　大風雨・種子島　種子島家家譜** 大風雨で、田畑の間にある溝を損じた。
278	**安政２年12月15日　１８５６年１月22日　大風・種子島　種子島家家譜** 大風で、西街の市人・濱田喜八の商舶が、前港【前ノ濱？】で破壊。
279	**安政４年４月25日　１８５７年５月18日　大風高波・徳之島　徳之島面縄家蔵前録帳** 二十四日から雨が降り出し、東風から風が嵐となり、時化模様に見受けましたところ、段々大風波になり、二十五日の夜、南風へ変わった際、右三艘の内円通丸に（おいて）は湊の北の干瀬へ乗り揚げ、金山丸は（跡）形も無く（なり）、盛恵丸に（おいて）は湊内へ沈み、
280	**安政４年７月29日　１８５７年９月17日　大旋風・種子島　種子島家家譜** 大**颶**（つむじ）で、港に逢った諸船は皆、転覆・沈没して、陸上に置いていた八幡丸が宙に舞い、多数尽く壊れた。建物を倒し、作物を傷つけ、その外、石が裂け、木が抜けたのが、（多くて一々）枚挙できなかった。
281	**安政６年５月11日　１８５９年６月11日　大雨・種子島　種子島家家譜** 昨九日から大雨で、鴎川の水（害が）あり、橋が壊れた。その外に、上中、西之表及び住吉村で、各々水害があって、多く田地を損じた。
282	**万延元年　１８６０年　桜島　日本災異志** 大隅の桜島嶽が噴火　※この間も『名勝図会』に「桜島の噴火は安永八年に起きた。それから後、今に至って五十年、なお煙霧を帯びている。」。『襲山考』もほぼ同文で「五十年を超える」とあり、少なくとも１８３０年代まで活動期にあった。なお、『桜島大正噴火誌』などは、万延元年の噴火を二月【１８６０年３月】とする
283	**文久３年７月１９日　１８６３年９月１日　土石流・国分　邦永仲之進日記** 大雨で、（大隅国）曽於郡清水（郷）・国分（郷）辺り、土石流が出て、田地が大破し、死人・死牛馬等が数多く有ったとのこと。
284	**元治２年閏５月２日　１８６５年６月24日　大雨洪水・谷山　名越高朗日記** 大雨で洪水だ。五ツ半時分【午前８時頃】から地元役所へ出勤し、九ツ時分【正午前】帰宅で、直ちに惣福の前田池へ出向いて行き、洪水を防ぐ対応をいたし、七ツ過【午後５時頃】帰り、夕方又々大降りで、田地へ出向いて行き、夜半まで水を防ぐ対応をし、ようやく防ぎ止めまして帰宅。
285	**元治２年６月４日　１８６５年７月26日　大雨洪水・谷山　名越高朗日記** 夜半の大雨で洪水（になり）、諸所の田地へ砂の流入があった。
286	**慶応２年５月14日　１８６６年６月26日　大雨洪水・谷山　名越高朗日記** 九ツ時分【正午前】帰り、直ちに上福元村と中塩屋の田地の砂流入のため見分に出向き昼過ぎ帰宅。
287	**慶応２年５月25日　１８６６年７月７日　大雨洪水・川辺　次渡日帳か** 一、慶応二年（二五二六）五月二十二日半日雨天、同二十三日雨天、二十四日雨天、二十五日【１８６６年７月７日】は九ツ時　分【正午頃】から強雨降り続き、七ツ時分【午後４時頃】から大洪水となり、二十六日まで雨天で、住家に水が上り、役人が　検分として派遣されて来た。 被害調査の結果は左の通り 田地に砂が入り洗い剥がれた　　五十九町三反二畝二十七歩 畠作の二割程度が被害　　【59ヘクタールor万㎡　弱】 流れた家一軒 （破損？流失？）橋一個所

	落井手【流失？破損？井堰】　九個所 土手流れ【直線部の？堤防の流失】　五十七間【103m余】 川隈流れ【川が曲がる部分の岸の流失】　六百十間【1,109m余】程 溺死一人　これは松崎川で、今田村の園田屋敷の名頭善右衛門の 三男・八太郎で当年二十歳　※『川邊村郷土誌』 同日付けの谷山郷郷士年寄役・名越高朗の日記でも「終日大雨」
288	**慶応２年６月29日　１８６６年８月９日　大雨風・種子島　種子島家家譜** 大雨風で、この日の夕、外国舶が、竹崎の小島で、破壊した。（死を）免れた者は、僅かに三人（うち一人は黒人）。 ※同日付けの谷山郷郷士年寄役・名越高朗の日記でも「雨…七ツ時分【４時頃】より相應之【相当の】大風」
289	**慶応３年５月23日　１８６７年６月25日　大雨洪水・蒲生　蒲生郷組頭所日記** 四ツ半時分【10時半頃】から大雨が降り出し、八ツ時分【14時過ぎ頃】なりましたところ、山岳が共に【各所で？】崩れ、未曽有の大洪水で、そのため川端は勿論水に浸り、且つ田畠も大分の痛みになりましたけれども、未だ如何程の損害か分からないことであります。… 西浦の内・小川内に居住する郷士の大脇新七並びに田代助右衛門の姉・同助右衛門の二男の助次郎が、背後の山が崩れ流れ出し埋もれ死との報告、親類達から申し出ました。並びに川崎龍助が、下人四人、右と同様に埋もれ死との報告申し出ました…
-1	**大雨洪水・加治木　邦永仲之進日記** 加治木は洪水で、網掛橋が流失し、同橋の東河岸の人家、有馬善左衛門・川畑惣左衛門・原口藤右衛門跡・濱川甚右衛門跡・中馬平右衛門・佐藤宇兵衛跡が全て流失し、御船手の御家廻り、半分方が流失いたしました件を申し出た。詰合中の皆が驚愕いたしました。【中略】両人から申し上げました概要は、昨二十三日【25日】、四時分【10時頃】から雨が大降りで、九時分【０時頃】から川の水が殊の外（更に勢いよく）増しまして、八ツ【２時頃】過ぎ最も盛んになり、七時分【４時頃】から追々減水し、七半【５時】頃、あれこれ水中をあっちこっち行き交いますようになりました。満水のときは、（日木山川の加治木北東外れの）郷田の滝（別名「五反滝」）の水が河道を離れ、安国寺の前へ打出し、吉原前後は一面の海のように成り、（網掛川の加治木北外れの）龍門滝の水が椿窓寺の後ろへ打出し、春日前を過ぎ、反土の井出川と合流し、上木田前の実窓寺川原から小鳥後迄が一面の海のように成り、春日前の太鼓橋・網掛橋・日木山川の太鼓橋が皆落ち、能仁寺橋は無事、　人家は、奈良木川の春日前辺り四五軒が流失し、網掛橋の東河岸の七八軒が御船手迄流失しました。水が減じましたところ、安国寺前・上木田前から小鳥後迄、新田内が全て、土砂が洗い込み、潟浜のように成りました。そのほか破損箇所は未だ不明で、満水の時は、田中門の者達が何れも屋上に上り、助け給え助け給えと呼ぶ声が、なかなか聞くに忍び難くありましたけれども、船を漕ぎ寄せましたらば、逆巻く水に押し落とされ寄り付き難く、中洲辺りまでは船を派遣し人を乗せ助けましたけれども、田中門へはできず、眼前に人を見殺しにするのは誠に残念だと言い合いましたけれども、致し方無いところで、ようやく減水と成り、辛うじて何れも命ばかりは助かりましたとのことを、聞くに耐えかねました事など細々両人から申したて、やがて退去して帰って行きました。 一加治木の洪水に付いては、

一溺死五人
一同牛七疋
一同馬三疋
一倒家五十八軒
　　内三十七軒　居家
　　十七軒　流失
　　十五軒　　馬小屋
　　三軒　　流失
　　五軒　土蔵　流失
　　一軒　板蔵　流失
右の通りで、披露書が加治木から到来いたしました。

（後日の記事には被災が「加治木中のおよそ田地百九十六町余り【２百ヘクタール弱】、高三千七百五十石余り【560トン】有り、浜の新田・山野の請代等の地方はこの外で有ります」、復旧工事に要する作業員の見積りが「三十四万四千二百十六人」・日との記述がある。）